

図234 弥生時代（上）と古墳時代（下）の田井中・志紀遺跡

さらに駐屯地西区のみならず八尾空港B滑走路北側でも、黒色土とともに当該期の遺構を検出していることから、集落域は最も拡大していたと考えられる。ところが中期後半—第IV様式—の遺構は皆無で、遺物もほとんどみられなくなる。

第V様式—庄内期は、駐屯地西区内の各調査区とも井戸・土坑など若干の遺構はあったものの、第II・第III様式に比べれば僅少といわざるをえない。

一方駐屯地東区は、弥生時代前期T.P.+9.0mと駐屯地西区よりやや高かったが、多数のサヌカイト類を出土した96-2区土坑30以外に、堅穴住居や廐棄土坑のような遺構は未発見であり、居住地として積極的に利用されたとはい難い。むしろ96-2区で方形周溝墓を検出したことから、墓域として利用されたようだ。ただ96-1区において、前期～中期にかけての溝を数条検出したが、すぐ西側に隣接する調査地や志紀遺跡では、弥生前期のピット群を検出している。

ここで弥生時代の田井中集落の範囲について考えてみたい。既述したように田井中遺跡駐屯地地区の弥生集落は、常に一定していたわけではない。現在の資料では各時期における動きを把握するまでは至っていないので、ここで想定する範囲は最大域ということになる。

まず集落の西端は、北濠地区との間にある谷をあてることができる。ここでは北東方向への溝が数条検出されており、駐屯地地区に展開する田井中集落の環濠とする意見もある。集落北端については、96-3区に黒色土の堆積はなく、微高地縁辺であることからみて、駐屯地北端付近をもって集落の北限と考えることができる。集落の東限については、95-1区以東に黒色土が全く存在しないことや、遺構・遺物のあり方が駐屯地西区と異なることから、駐屯地西区にそれを求めなければならない。

駐屯地西区東端の調査区は、9×11mという小規模調査区であるが、東へ向かって徐々に薄く堆積する黒色土を確認している。おそらくこの辺りが集落域の東限とみなせよう。なお南限はヘリ離発着用のエプロンとなっており、全くの未調査である。

参考までに、主な調査地点における出土遺物量（コンテナ数）と調査面積の関係をみると、95-2区が1m²あたりのコンテナ数が0.97個と最も多く、駐屯地西区全体でも0.22～0.39個といった数値を示す。ところが同東区では、0.01～0.03個といった極めて低い値しか得られない。

以上のことから弥生時代の田井中集落は、駐屯地西区を中心に東西約300m・南北約350m程度の範囲に展開していたものと思われる。94-1区で検出した各時期の溝については、環濠の一部とみなすこと也可能ではあるが、検出面積が極めて狭いこともあり、結論は将来に委ねたい。

次に古墳時代以降の田井中遺跡について、少し触れておこう。古墳時代前期については、駐屯地西区の95-2区をはじめ周辺の既調査区で、掘立柱建物2棟などを検出しているが、同東区では検出例はない。前代に続く土地利用だったようだ。ところが中期になると、それまで居住地としてほとんど利用されなかった駐屯地東区に、わずかながら掘立柱建物（95-1区第3面掘立柱建物45・55）や廐棄土坑（96-1区第3面土坑8）などが営まれる。逆に同西区では、わずかに遺物が出土する程度となり、円墳が築造される。しかし後期に属する遺構は現在のところ皆無で、出土遺物も極めて少である。

奈良時代以降の田井中遺跡については、具体的な発掘資料に乏しい。96-3区第3面で条里制施行後の、96-2区東側の調査区で平安時代末の、さらに96-1区で中世の水田面をそれぞれ検出したにとどまり、遺物もほとんど出土していないのが実情である。木の本遺跡の調査で復元されたように、当地一帯は、志紀遺跡も含めて条里制に基づく耕作地が展開していたものと思われる。

（本節の記載にあたり、第1章注に掲載した文献を参考にした。）

第2節 弥生時代前期の区画墓

1. はじめに

区画墓の認識 1960年代以降、弥生時代墓制のなかに埋葬主体以上の面積を周溝や盛土により区画されたものが認識されるようになった。それは“周溝墓”と呼ばれ、田井中遺跡96-2区でも検出した。一定の範囲を区画した墓制にはさらに台状墓や墳丘墓などもあり、それらの比較検討が進められている。以下、前期の区画墓資料を集めし、実態を検討し、その成立について考える。

区画墓の概念規定 多くの研究があるが、代表的な概念規定を掲げる。

鈴木敏弘は、弥生～古墳時代の墳墓を墓域の区画方法（「区」と略）と埋葬施設（「施」）とに着目し、周溝墓（区：溝による、施：地山に掘り込むが、盛土が発達すると封土中）、台状墓（区：地山を整形、施：地山に掘り込む）、台状墳（区：盛土、施：墳丘（封土）内）、古墳、の4者に分類した。³⁾

近藤義郎は、墓域を画するのに、“墳丘墓”はおもに盛土により、周溝墓はおもに溝により、台状墓はおもに周囲の削り出しによるとし、これら三者に弁別しにくいもの的存在も指摘した。⁴⁾

その後、周溝墓や台状墓にも盛土が、また、台状墓や墳丘墓にも周溝が認められるような調査例がさらに増加すると、個々の墳墓をどれに該当させるかが問題になってきた。

そこで都出比呂志は、方形周溝墓、方形台状墓、墳丘墓の三者を質的には区別したいとして、それらを広義の“墳丘墓”と一括して呼んだ。さらに墳丘墓概念を弥生時代から中世までの墳丘を有する墓にまで拡大し、そのなかで細分を考えた。⁵⁾

石野博信は、方形周溝墓は低墳丘の方形墳であり、方形台状墓とも本質的には異なるところがないとして、これらの墓制を“方形区画墓”と総称する。⁶⁾

近藤義郎も、何がしかの封土を持つことを指標に墳丘墓、それも海外のものや古墳などと区別しておしなべて“弥生墳丘墓”と呼称するようになる。⁷⁾

田代克己は、溝よりも盛土を重視し“方形盛土墓”を提唱する。⁸⁾

このように、“墳丘墓”概念が拡大してきたが、“周溝墓”や“台状墓”などの用語も一般的に使用されており、近年ではそれらが立地の差によって生じたという見解が主流となっている。ここでは概念規定が完全には一致していない現状を踏まえた上で、暫定的にそれらを“区画墓”（=“広義の墳丘墓”“弥生墳丘墓”）と総称する。⁹⁾

2. 弥生時代前期の区画墓の資料

知りえた範囲で18遺跡約60例存在するが、検出や報告が一部に止まったものも多い。それらの要目を表17に示し、以下補足する。なお、遺跡名の前の○付き数字は、表17・図235の遺跡番号と一致する。

①板付田端 福岡県福岡市博多区板付

1917年の遺跡破壊後の踏査記録がある。面積二畝餘（約200m²）、高さ一丈餘（約3 m）の円墳状隆起に6基以上の豪棺が存在し、そのうちの3基から細形銅矛と細形銅劍各3口などが出土したという。採集土器や青銅器などから弥生時代前半～中期初頭の墳丘墓と考えられる。¹⁰⁾

②東小田峰 福岡県朝倉郡夜須町東小田

前期～中期の墳丘墓5基のうち1基は前期前半とされる。墳丘から検出された2列に並ぶ8基以上の土壙は木棺の可能性もある。¹¹⁾

③龍川五条 香川県善通寺市原田町

前期の遺構として、自然河川をはさんで東側高地に環濠集落が、西側高地に方形周溝墓1基、円形周溝墓2基、木棺墓2基および土坑多数が検出された。

④門 島根県飯石郡頓原町志津見

円形周溝墓が1基検出された。かなり削平されているが、周溝と2つの埋葬主体部から刻目突堤文土器が出土し、縄文時代晩期と報告されている。¹⁴⁾

⑤百間川沢田 岡山県岡山市沢田字高繩手

高繩手A調査区の前期の環濠集落内から、堅穴住居5棟、土壙、柱穴などとともに、円形周溝墓を2基調査。うち円形周溝2からは百間川編年前期II（前期中葉）の土器が出土し、周溝に開まれた部分の中心から木棺の小口と考えられる一対2個の小穴も検出されている。¹⁵⁾

⑥東武庫 兵庫県尼崎市武庫元町

前期古段階～中期初頭の方形周溝墓が22基調査された。報告書では事実報告に加え、前期の周溝墓について、1.平面形、2.埋葬主体数、3.埋葬主体の位置、4.群構成、5.規模、6.墳丘の盛土と埋葬施設、7.いわゆる陸橋部と平面形、8.周溝墓群の立地・集落との関係、9.初期周溝墓の分布、10.周溝墓の被葬者、の各項目を山田清潮が詳細に検討している。¹⁶⁾

⑦駄坂・舟隠 兵庫県豊岡市駄坂字舟隠

古墳群や山城と重複する尾根稜線で、方形周溝墓が8基検出された。前期新段階～中期初頭と報告されるが、土器の図面を見る限り後者（第II様式）により近く位置付けられよう。¹⁷⁾

⑧七尾 京都府中郡峰山町字荒山小字七尾

前期末～中期初頭の高地性集落である扇谷遺跡の谷を隔てて南に位置し、その墓域とされる。方形台状墓が2基調査され、うち方形台状墓IIから前期末の弥生土器が出土した。立地や形状の共通性から方形台状墓Iも同時期と考えられる。

（参考）岡崎 京都府京都市左京区岡崎徳成町

1982年に開催された埋蔵文化財研究会の資料に、「方形周溝墓4基、弥生時代前期」と掲載されているが、その後当資料を引用した論文もなく、詳細不明。¹⁸⁾

⑨東奈良 大阪府茨木市東奈良・沢良宜西

G-4地区で検出された10基の方形周溝墓中4基が前期末とされる。埋蔵文化財研究会資料掲載の方形周溝墓配置図によると、「I」（前期のことか）または「前期上器出土地点」と記入されたものは、①と②の共有溝、②、④のD-13、⑦のD-18の4カ所である。これら出土土器は、古相が森田編年I-2様式（前期中段階後半）、新相がI-3様式（前期新段階前半）に位置付けられた。¹⁹⁾

また、F地区でも前期～中期の方形周溝墓を5基検出とされるが、詳細不明。²⁰⁾

⑩安満 大阪府高槻市八丁曖町・高垣町

概報は、ガリ版刷り、本文2頁、図2枚の体裁。本文には前期の方形周溝墓の記述はないが、遺跡略図には調査区南西隅の14とされた方形周溝墓に「（I様式か）」と記入されている。²¹⁾

（参考）亀井 大阪府八尾市亀井町・南亀井町・大阪市平野区長吉出戸

概要報告では（その2）12区の3基の方形周溝墓中、S T1202とS T1203とは共有する周溝出土土器から前期末葉に位置付けられた。しかし、遺物再整理の過程で周溝墓よりも下層から第II様式の土器が出土していたことが判明し、これら方形周溝墓は中期初頭以降の築造と修正された。²²⁾

表17 弥生時代前期の区画墓一覧

	遺跡名	立地	遺構名	墳丘の規模 ()は現状	埋葬主体 種類と数	主体 位置	主体 方向	周溝形状	時期	土器を除く副葬品 ()は周溝出土遺物
1	板谷田端		円墳状隆起		便棺 6 +				前期末?	
2	東小田塚	段丘縁辺	墳丘墓	18 × 13m	土壇 8 +				前期前半	
3 鶴川五条	II区	微高地	S T01 方形周溝墓	7.6 × 6.8				全周?	前期	(磨石 2)
			S T02 円形周溝墓	径 4.8~5.2	木棺 1	中央			前期	打製石器 1 [木棺]
			S T03 円形周溝墓	径 5.5				全周	前期	(打製石器 1・スライバー 1)
4	門	河岸段丘	円形周溝墓	径 6.2	土壇 1 (第 1) 土壇 2 (第 2)	中央 非中央			奄美文期	磨片石 [第 1 主体] (磨製石斧 1・ 打製石器 1・叩石 1)
5 百間川沢田 高磯手人区		微高地	円形周溝 1						前期中葉?	
			円形周溝 2	径 5.6	木棺 1	中央			前期中葉	
6 佐武原	後背高地	1号墓 方形周溝墓	7.8 × 6.3	木棺 1	中央	平行			前期新段階古	
			7.0 × 6.0	木棺 1	中央	平行	二隅欠		前期新段階古	堅櫛・不定型石器 [木棺]
			9.6 × 7.5					四隅欠?	前期中段階古	
			11.4 × 9.1	木棺 1 (2号) 木棺 1 (1号) 土壇 1 (3号)	中央 非中央 非中央	平行 平行 平行			前期中段階古	(楔形石器)
			3.7 × (2.7)	土器棺 1	非中央				前期新段階古	石器 [土器棺]
			6.8 × 5.4	木棺 1	非中央	平行			前期中段階新	
			5.6 ×	木棺 1	中央	平行			前期中段階古	(磨製石器)
			3.5 × 3.3						前期	
			9.3 × 8.8						中期初頭	
			14.0 × 12.3					一隅欠	前期新段階古	(石庖丁・櫛)
		2号墓 方形周溝墓	6.8 × 4.6	木棺 1	中央	直交			中期初頭	
			6.0 × 4.0						前期中段階古	
			4.0 ×	土壇 1					前期中段階新	
			5.8 × 5.5	木棺? 1					前期新段階古	
			16.0 × 8.5						前期新段階新	(磨石)
			7.0 × 6.8						前期新段階古	(楔形石器 [土器])
			4.3 × 3.5						前期新段階新	
			5.7 × 3.4						前期新段階新	
			(6.5) × (3.5)						前期新段階古	
			6.5 ×						前期古段階	
			3.8 ×						前期新段階古	(楔形石器)
			4.4 ×						前期古段階	
7 軟坂・舟掘	尾根	11号墓 方形周溝墓 (11) × 7.3	木棺 1	中央	平行				打製石器 1 [埴頂部]	
			6.5 × (4.2)	木棺 1 木棺 1	中央? 非中央	平行? 平行?			前期新段階 ~中期初頭	

弥生時代前期の区画墓

遺跡名	立地	遺構名	墳丘の規模 ()は現状	埋葬主体 施設類と数	主体位置	主体 方向	埋葬形状	時期	土器を除く副葬品 ()は周溝出土遺物
7 牧板・舟屋	尾根	13号墓 方形周溝墓	10.5 × (6)	木棺 1	中央?	平行?			菅玉125+・打製石錐 1(木棺)
		14号墓 方形周溝墓	(11.3) ×	木棺 1	非中央	平行?			打製石錐 1(木棺)
		15号墓 方形周溝墓	(4) ×						
		4号墓 方形周溝墓	7.3 ×	木棺 1 石蓋土壇 1	中央 非中央	平行 平行		前期新段階 ～中期初頭	打製石錐 1(木棺)
		7号墓 方形周溝墓	7.2 ×						
		9号墳下層		木棺? 1					磨製石錐 2・打製石錐 5 チップ 1(木棺?)
8 七尾	丘陵	方形台状墓 I		木棺 1 木棺 1 土壇 1	中央 非中央	平行	なし	前期新段階?	
		方形台状墓 II		木棺 1 土壇 1	中央 非中央		なし	前期新段階	
参 同塚		方形周溝墓 4基?						前期?	
9 実奈良 G-4区	高高地	① 方形周溝墓							
		② 方形周溝墓		盜棺 1ほか					
		④ 方形周溝墓		土壇?				前期	
		⑦ 方形周溝墓		土壇?					
10 安満	近畿住宅	花園原	14 方形周溝墓					前期	
参 亀井(その2)12区	自然堤防	S T1202方形周溝墓							
		S T1203方形周溝墓						中期初頭以降	
11 田井中	96-2区	自然堤防	方形周溝墓96	12.4 × 9.3				全周	前期新段階 (石核 1・鋒片 7)
12 四ツ池	1973年3区	丘陵尖端	方形周溝墓	(7.5) × (7.0)				前期	
13 榎上曾根	I地区	段丘	I-1号方形周溝墓	8.3 × 7.0	土壇 2	非中央	平行	前期新段階	
参 服部	自然堤防	方形周溝墓						前期??	
14 平城宮246次右馬塚	高高地	SX16380方形周溝墓	11.0 × 9.5					全周?	前期
15 多	第11次	高高地	方形区画面溝式道標	7 ×	土壇?	中央	斜行	前期末 (石核 1)	
16 松ノ木	C地区	高高地	方形周溝墓 3	(9) × (6)				中期前半以前	
17 山中	自然堤防	S Z01 方形周溝墓	9.8 × 8.0				四隅欠		
		S Z02 方形周溝墓	10.0 × 7.0						
		S Z03 方形周溝墓	10.8 × 10.5				四隅欠		
		S Z04 方形周溝墓	(8.0) × 6.7						(打製石錐 4・打製石錐 1・石核・鋒片)
		S Z05 方形周溝墓	5.6 × 4.2					道貫川系土器を伴う段階	
		S Z06 方形周溝墓	6.5 × 5.6				四隅欠		(打製石錐 1)
		S Z07 方形周溝墓	6.5 × (5.1)						
		S Z08 方形周溝墓	8.4 × (6.0)						
		S Z09 方形周溝墓	(9.5) × 7.0						
18 朝日	第61区	高高地	S X140方形周溝墓	5.0 ×	盜棺 1	非中央	四隅欠?	前期末	

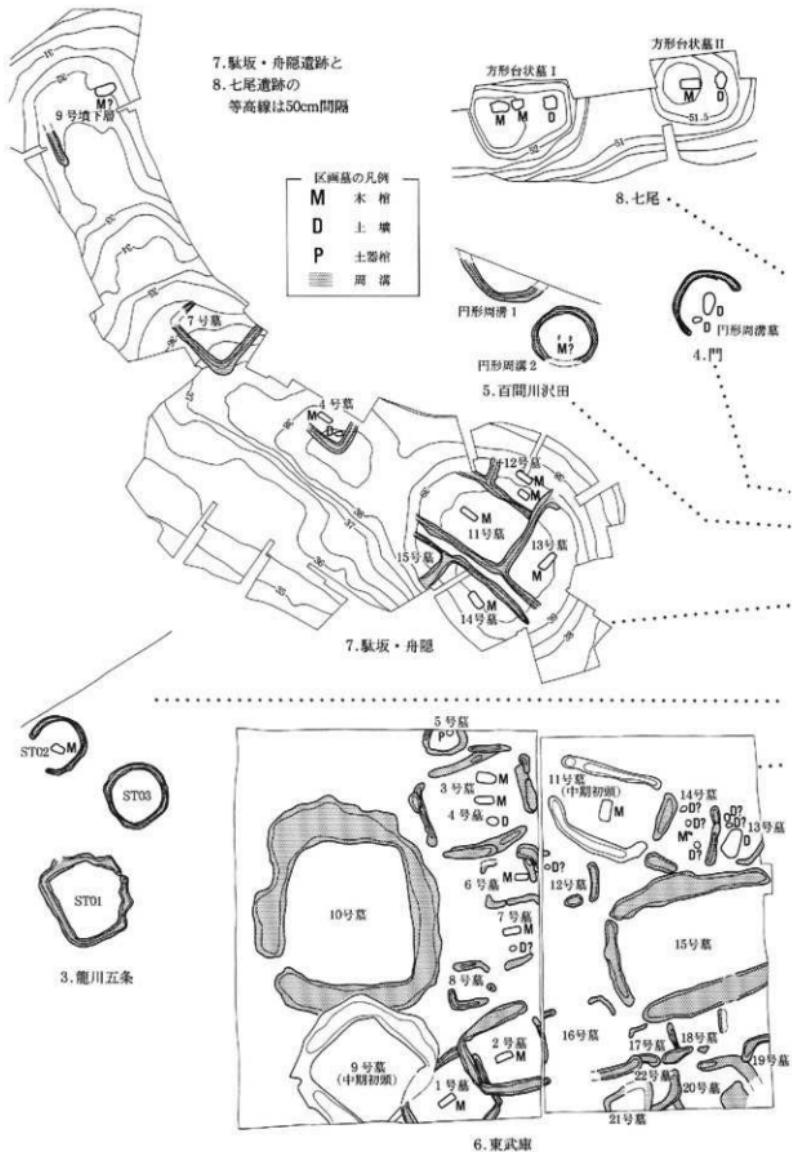
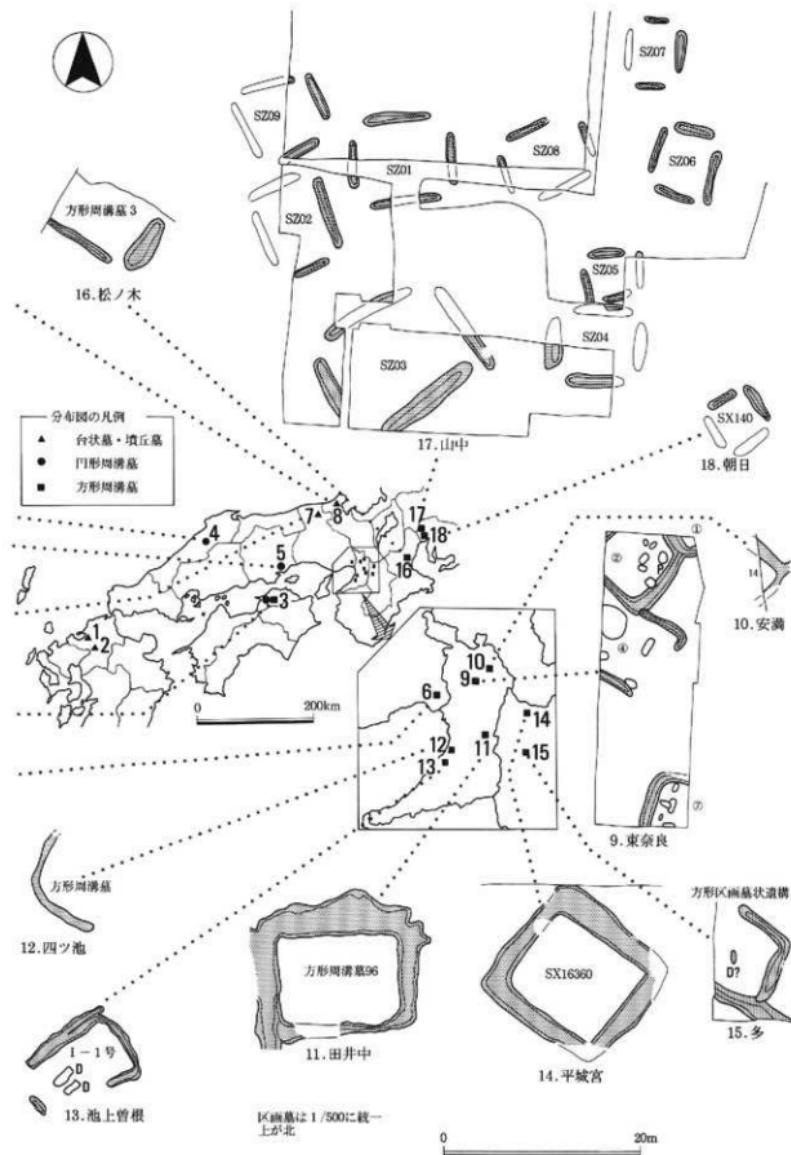


図235 弥生時代



⑩田井中 大阪府八尾市空港1丁目

96-2区第4面で方形周溝墓を1基調査した。他にその東に隣接する円形周溝状の溝や、96-1区第5面北東部でも方形周溝墓らしき遺構もみられたが、調査担当としては否定的である。²⁷⁾

⑪四ツ池 大阪府堺市浜寺船尾町

平面L字状の溝に囲まれた部分が前期の方形周溝墓とされるが、詳細不明。

⑫池上曾根 大阪府和泉市池上町・泉大津市曾根町

I地区のI-1号方形周溝墓²⁸⁾は、周溝内から第I様式新段階（前期末）の土器が出土し、方形周溝中央部の土壤が第II様式（中期前葉）のピットに切られているので、前期末と断定されている。

この方形周溝墓では、その南西側の土坑が埋葬主体であるか溝の痕跡であるか見解の分かれるところである。類例からすると、平面長方形の方形周溝墓の南西溝である確率の方が高いと考える。

（参考）服部 滋賀県守山市服部町

「弥生時代前期～後期の方形周溝墓50」³¹⁾と速報されたためか、前期の方形周溝墓として例示されることがある。しかし、その後刊行された概要報告や正報告によると、約360基に及ぶ方形周溝墓はいずれも中期以降の築造である。

⑬平城宮第246次 奈良県奈良市佐紀町

弥生時代の方形周溝墓5基を確認。完掘した2基のうちS X16360の周溝最下部から前期の壺用蓋形土器が出土した。³⁰⁾

⑭多 奈良県磯城郡田原本町多・宮森

鍵の手状の溝S D-02により区画された「方形区画墓状遺構」が調査され、溝から第I様式（前期）の甕口縁と壺底部2点、石庖丁未成品などが出土した。³⁰⁾

⑮松ノ木 三重県津市安東町字櫻ノ木・大水戸

C地区の方形周溝墓3の東溝から「いわゆる亜流遠賀川式土器の破片」が出土し、中期前半もしくはもう少し遅い可能性が指摘される。³⁰⁾

⑯山中 愛知県一宮市萩原町富田方字山中・大和町荊安賀

山中編年A期（遠賀川系土器を伴う段階）の方形周溝墓9基検出と報告される。うち出土土器が明示されているのは、方形周溝墓S Z01・02・03・04・05・06・07の7基である。溝を隔てて同時期の竪穴住居10棟も存在する。³⁷⁾

⑰朝日 愛知県西春日井郡清洲町・春日町・新川町・名古屋市西区

1982年の県教育委員会報告では、第61区のS X140の周溝埋土が弥生時代前期の土器包含層と区別できず、台状部から西志賀期の壺棺が出土したので前期と考えられた。しかし、1991年の県埋蔵文化財センターの報告では、新番号56B区S Z042が旧番号第61区S X140に該当するらしいが、56B区の方形周溝墓の項にはその記載がなく、181頁の一覧表では時期が朝日編年II期（朝日期・中期前葉）になっている。ここでは、『県報告』を用いS X140を前期の方形周溝墓として取り上げる。³⁰⁾

3. 弥生時代前期の区画墓の検討

（1）立地

微高地や自然堤防 弥生時代の方形周溝墓は自然堤防上、台地上、低地上、山丘上、丘陵上などに立地するが、前期の場合、微高地や自然堤防がほとんどである。⁴¹⁾

⑤龍川五条遺跡では、自然河川をはさんで西微高地に墓域が、東微高地には同時期の環濠集落が営まれている。⑥百間川沢田遺跡では、微高地上の環濠に囲まれた内部から前期中葉の5棟の竪穴住居と2基の円形周溝墓などが検出された。⑦田井中遺跡方形周溝墓96（96-2区）の検出レベルは同時期の集落（96-1区）より50~60cm高い。

つまり、平野部で集落と区画墓とが近接して営まれる場合、地下水位や移動の便など生活により適する部分に集落が存在することは容易に想像できるが、必ずしも墓域が集落より低いとは限らない。

尾根や丘陵 ⑦駄坂・舟脛遺跡の方形周溝墓群は、尾根上で古墳や中世山城と重複している。⑧七尾遺跡は現状では前期唯一の台状墓の遺跡だが、前期末～中期初頭の高地性集落として著名な扇谷遺跡と谷を隔て同様に丘陵上に立地する。この遺跡が位置する近畿地方の日本海側は、弥生～古墳時代には丘陵上に墓を営むことが常に行われていた地域であり、一部の前期古墳のように平野を見下ろす（あるいは平野から見上げられる）立地もみられる。

（2）墳丘

計測基準 周溝墓では周溝の外肩までが墓域として占められていて、他の土地利用が制限される。しかし、弥生時代前期の区画墓には墳丘墓や台状墓も存在し、それらは視覚的には墳丘端までを墓域とする。また、周溝墓でも後世の削平を受け本来の周溝外肩を失っている例が多い。そこで、区画墓の墳丘裾までの規模で検討する。この条件で墳丘の長・短軸とも判明するのは、8遺跡26例ある。

長短比 短軸長を長軸長で割った値（長短比）は、③龍川五条遺跡S T02・03や⑥百間川沢田遺跡周溝墓2の円形周溝墓では当然ながら1.0ないしそれに近い値となる。方形周溝墓では、0.9以上1.0未満は4例、0.8~0.9は9例、0.7~0.8は7例、0.7未満は相対的に少なく3例のみで、⑥東武庫遺跡15号方形周溝墓が16.0×8.5mで0.53と最も細長い。

例数が少ないので確定的ではないが、前期の区画墓では長短比に地域や小時期差による変化は読み取れない。平面形は、長方形（正方形を含む）を基本とするが隅丸や歪んだ形態のものも多い。

面積 面積的には、前期最小の区画墓は⑥東武庫遺跡8号周溝墓で約11m²、長短比0.94と正方形に近いが、同じく小さい部類の同18号周溝墓は約19m²、長短比が0.60と長方形である。一方、最大のものは②東小田峰遺跡の墳丘墓で約230m²、長短比0.72だが、次いで大きい⑥東武庫遺跡10号周溝墓は約170m²、長短比0.88となる。⑥東武庫遺跡では、8号周溝墓の約11m²から10号周溝墓の約170m²まで、調査された20基の方形周溝墓に前期の面積の最小と最大の例を含んでいる。

前期に限らず弥生時代の区画墓の中でも、⑥東武庫遺跡8号周溝墓は最小の部類である。一方、最大のものは中期に営まれた佐賀県吉野ヶ里遺跡S T1001墳丘墓で、40~45×26m以上の隅丸長方形を呈する。⁴⁵⁾ 次いで後期の愛知県豊田市川原遺跡の墳丘墓（方形周溝墓？）の約35×26m、約900m²、中期の朝日遺跡S Z208方形周溝墓の33.5×22.2m、約740m²などがある。すなわち、最大の例でみると、区画墓は前期に比べ中～後期になると面積数倍に大型化する。

盛土 ⑥東武庫遺跡の墳丘盛土は現存しないが、木棺の高さや中期の例から厚さ50cmと推定されている。⁴⁷⁾ 中期になると、たとえば方形周溝墓の典型である大阪府東大阪市瓜生堂遺跡第2号方形周溝墓では1.2mもの盛土が存在した。⁴⁸⁾

丘陵上の⑧七尾遺跡の2基の方形台状墓は、主に地山削り出しによって墳丘を形成している。尾根上に立地する⑦駄坂・舟脛遺跡の周溝墓群でも、墳丘頂部への若干の盛土以外は確認されず、台状墓と同様に地山を削り出して成形している。

(3) 埋葬主体

種類と数と位置 埋葬主体の検出された前期の区画墓は30例弱あるが、後世の削平と調査範囲の制約のため状況はあまり明確ではない。

⑥東武庫遺跡を例にとると、前期の方形周溝墓20基中9基で木棺や土壙などが調査された。木棺が検出された6基のうち5基は埋葬主体が1基のみで、木棺が墳丘中央部に位置するもの3例（1・2・7号墓）、墳丘中央をはずれているもの1例（6号墓）、一方の小口穴のみ1例（14号墓）である。埋葬主体が複数認められるのは4号墓で木棺2基と土壙1基が検出され、木棺（2号主体部）が中心に位置する。以上前期の例はいずれも墳丘と木棺の長軸が平行するが、中期初頭の11号墓の木棺は墳丘長軸に対し直交する。土壙では4号墓3号主体部や12号墓土壙¹⁾で、脂肪酸分析により動物性コレステロールが検出されヒトを埋葬していた可能性が高いとされる。土器棺も5号墓で1基検出された。木棺の比率は高いが、このようにひとつの遺跡でも埋葬主体の配置に特定の傾向はみいだしにくい。

次に、前期の区画墓を埋葬主体の数で分けると、1基10数例、2基4例、3基以上4例以上となる。

埋葬主体が1基のものでは墳丘の長軸と平行に中央部に木棺が位置する例が比較的多く、方形周溝墓では⑥東武庫遺跡に5例と⑦駄坂・舟隠遺跡に3例以上みられる。また、円形周溝墓の③龍川五条遺跡S T02円形周溝墓と⑤百間川沢田遺跡円形周溝2でも、ともに墳丘中央部に1基の木棺が検出されている。⑥東武庫遺跡5号墓土器棺と6号墓木棺、⑦駄坂・舟隠遺跡14号墓木棺などは墳丘の中央から外れるが、後者は斜面という立地の制約もある。

2基では、④門遺跡円形周溝墓の土壙2基、⑦駄坂・舟隠遺跡12号墓の木棺2基、4号墓の木棺と石蓋土壙、⑧七尾遺跡方形台状墓IIの木棺と土壙、⑬池上曾根遺跡I-1号方形周溝墓の土壙2基の例がある。⑯池上曾根遺跡例を除き中心埋葬とその脇の別の埋葬という配置になっている。

埋葬主体の多い例は九州に特徴的で、②東小田峯遺跡墳丘墓では土壙8基以上、①板付田端遺跡円墳状隆起では斂棺6基以上である。⑥東武庫遺跡4号墓でも木棺2基と土壙1基が検出されている。

すなわち、九州地方では墳丘に多数の埋葬を、瀬戸内海沿岸では円形周溝墓の中央に木棺を1基営んでいる。近畿地方の北部や西部では墳丘中央に木棺を1基埋葬する例が比較的多く、埋葬主体が2~3基の場合も中心埋葬は明確である。その他の地方の実態は明確ではない。

このように、前期の区画墓の埋葬主体数には地域差がある。その埋葬主体も北部九州の①板付田端遺跡では斂棺、中国地方から近畿地方にかけては木棺や土壙や土器棺と、同時期・同地域の区画されない墓制と同様である。

方向 埋葬主体は墳丘の長軸と平行に営まれている場合が多いが、墳丘自体はほとんどが任意の方位を向いている。地形的な制約によるものと考えられ、その最たる例は尾根稜線に立地する⑦駄坂・舟隠遺跡で、平野部では自然流路や溝に規制されるものが多い。ただし、⑥東武庫遺跡10号墓や⑪田井中遺跡方形周溝墓⁹⁶⁾といった比較的規模の大きなものが、中期の代表的区画墓である大阪府東大阪市瓜生堂遺跡第2号方形周溝墓や大阪市加美遺跡Y-1号墳丘墓などと同様に方位に則るようにみえることは、弥生時代の方位認識を考える際に気になる事例である。

深さ 埋葬主体の深さは盛土の高さと密接に関わる問題だが、盛土のほとんどは削平を受けている。ただし、前期の区画墓では、埋葬主体を周溝最深分より低いレベルまで極端に深く掘り込む例はない。

人骨 現状では、弥生時代前期の区画墓からの出土人骨はない。

周溝内埋葬 中期の方形周溝墓にしばしばみられる周溝内埋葬ではあるが、前期の墳丘墓では未発見で

ある。わずかに、⑦駄坂・舟隠遺跡4号墓の周溝外でその一部を切る木棺が検出されている。

(4) 周溝

平面形態分類の傾向 方形周溝墓は一般に平面四角形であるから、周溝は隅で切れる場合（一隅、二隅（一辺の両端と墳丘の対角がある）、三隅、四隅）、辺で切れる場合（一辺、二辺（接する二辺と対する二辺がある）、三辺、四辺）、それらの組み合わせ、さらに全く切れず全周する場合が考えられ、各論者ともこの視点から分類している。その際方形周溝墓の地域差を反映してか、東海地方以東の研究者は四隅で切れるものから、近畿に重点を置くかあるいは全国的に検討した研究者は周溝が全周するものから、分類記号を振る傾向にある。

平面形 削平や調査区の制約のため、全容が判明する前期の周溝は10数例のみである。

四国の③龍川五条遺跡S T01方形周溝墓の東周溝は、途切れ部の幅が狭いことから本来全周していたと報告されている。しかし、この辺のみ大きく外側に張り出しており、途切れないまでも一辺の中央部で浅くなっている前期唯一の例である。前田清彦によると一辺の中央を掘り残す型（前田分類c類³⁰⁾以下同じ）は、周溝が全周する型（a類）や一隅を掘り残す型（b類）などとともに、畿内系で中期以降よく出現するとされる。

近畿地方では、⑪田井中遺跡方形周溝墓96は全周する型（a類）で、⑫平城宮S X16360方形周溝墓の周溝も全周する（a類）可能性が高い。⑥東武庫遺跡では、前期の方形周溝墓20基中、2号墓は一辺の両端を掘り残す型（d類）、3号墓と4号墓とは四隅を掘り残す型（g類）、10号墓は一隅を掘り残す型（b類）と、1遺跡に3類型みられるがa類は現存しない。しかし、a類は墓造営後の削平のためみかけ上他の型となる可能性がある。つまり、前期段階からa類が普遍的と考えられる。

東海地方の⑬山中遺跡の方形周溝墓9基のうち周溝の判明するS Z01・03・06は、いずれも四隅を掘り残す型（g類）である。この遺跡では未完掘も含め全てこの型と報告され、調査で検出された部分をみると限りそれを否定する根拠はない。この型は、従来より東海地方以東に多いことが知られており、前期でもまた同様である。

周溝形状が異なる理由として墓道の発想や土木作業量の省力化が想定できるが、決め手はない。

墓道として一辺の溝の中央部を掘り残す場合、前期の方形周溝墓では埋葬主体が墳丘長軸に平行する例が多いので、埋葬主体に対し正横ないし頭または足の方から近づくことになる。他方、周溝の隅を掘り残す場合は、設計や規格の厳密な前方後円墳で墳丘上への通路が前方部角にみられる例に通じる。

作業の省力化の面からみると、周溝掘削と墳丘盛土を同時にを行う場合、盛土の供給源として運搬距離の長い周溝の四隅をあえて掘る必要はない。しかし、周溝の角に土器が供献される場合があることなどから、省力化のためだけにこの重要な周溝角を掘り残したとは考えにくい。

断面形と埋土の流入方向 周溝の断面は、図示された③龍川五条、⑤百間川沢田、⑥東武庫、⑪田井中、⑫平城宮、⑯多、⑭山中の諸遺跡例では、いずれもU字形ないし逆台形を呈する。

周溝埋土が主に墳丘と想定される側から流入している例には、⑯多遺跡方形区画墓状遺構東溝や⑭山中遺跡S X03方形周溝墓がある。

一方、⑪田井中遺跡方形周溝墓96の東側の周溝断面を観察すると、北溝では先に外側からシルト混じり細砂が、その後墳丘側から粗砂混じり粘土が堆積している。また、東溝では先に外側から砂混じり粘土が、その後墳丘側から細砂混じりシルトが流入しており、北溝とは土質が異なる。墳丘が全く遺存しないのでその盛土も不明だが、この状況から周溝外側から雨や洪水に伴う土層の流入があり、その後墳

丘盛土が崩れ周溝に堆積した状況を想定することもできる。

その他大多数は周溝の内側または外側に特に片寄ることなく下層から順に埋土が堆積しているもので、
⑥東武庫遺跡11号方形周溝墓の墳丘盛土と想定される埋土層も同様である。

(5) 副葬品・着装品

供獻土器 前期の区画墓では副葬品や着装品は少ない。ただし、中期の方形周溝墓でもよくみられるように、埋葬主体および周溝に供獻土器を伴うものは比較的多い。

埋葬主体出土品 埋葬主体から土器以外の遺物が出土したのは、次の4遺跡8例である。

③龍川五条遺跡S T02円形周溝墓の木棺内から打製石鐵1点。④門遺跡円形周溝墓第1主体部から磨石片。⑥東武庫遺跡では2例あり、2号墓の木棺内から堅櫛と不定形石器1点、5号墓の土器棺内から打製石鐵1点が出土した。⑦駄坂・舟隱遺跡には4例あり、13号墓の木棺から管玉125個以上と打製石鐵1点、14号墓の木棺から打製石鐵1点、4号墓の木棺から打製石鐵1点、9号墳下層の埋葬主体から磨製石鐵2点と打製石鐵5点とチップ1点がそれぞれ出土した。8埋葬主体中6例から出土した石鐵が目立つが、この時期の集落、武器、出土人骨などのあり方からすると直ちに戦いに結びつくものではなく、むしろ埋葬・祭祀行為の結果や被葬者の生前の性別や役割を示す品物と考えられる。他の出土品では、⑥東武庫遺跡2号墓木棺の堅櫛は、縄文時代および弥生時代の特に近畿地方の前期に通有な形態である。⑦駄坂・舟隱遺跡13号墓木棺の125個以上の管玉は、区画墓のなかでは前期に限らず弥生時代を通じても量的に多い。

周溝出土品 周溝からは、③龍川五条遺跡S T01方形周溝墓およびS T03円形周溝墓、④門遺跡円形周溝墓、⑥東武庫遺跡の5基の方形周溝墓、⑪田井中遺跡方形周溝墓96、⑬多遺跡方形区画墓、⑭山中遺跡の2基の方形周溝墓から石器が出土した。埋葬主体出土例とは対照的に石鐵は12例中4例に止まり、磨製石器や楔形石器など変化に富んでいる。

(6) 墓地構成

調査範囲内の分析 ③龍川五条遺跡では、自然河川をはさんで環濠集落と墓域とが分離している状況が明らかにされた。墓域は周溝墓3基、木棺墓2基、土壙墓の可能性のある土坑群からなる。近畿地方や中国地方の弥生時代墓制では、上位から順に、卓越した埋葬主体をもつ区画墓（墳丘墓など）一埋葬主体が複数の家族（世帯）墓の区画墓（周溝墓など）一区画はないが棺を有する埋葬（木棺や石棺）一素掘りの埋葬（土壙墓）一未成人用の土器棺墓、という階層性が一般的に認められる。龍川五条遺跡の場合、周溝墓から土器と石器が出土するに対しS T04木棺墓からは管玉6個が出土し、埋葬施設と出土品の格差とが対応しない。同様に、出土品が区画墓埋葬主体に比べその周辺の埋葬施設でも劣らない例は、後期の京都府竹野郡丹後町大山遺跡などでも認められる。

⑭山中遺跡でも、溝をはさんで北東に堅穴住居10棟、南西に方形周溝墓9基が検出され、集落と墓域の分離が確認された。方形周溝墓群は時期差は明確ではないが、切り合ひなく分布している。

⑥東武庫遺跡では、主に墳丘の主軸方向と時期差から周溝墓をグルーピングし、5つの有力家族の墓域とされる。

以上の例を含め、前期の区画墓の墓地構成を区画墓以外の墓制や墓域以外の遺構群との関連で考えてみると、A：区画墓のみで墓地を構成（⑥東武庫 ⑦駄坂・舟隱 ⑪平城宮 ⑬多 ⑮松ノ木）、B：区画墓と他の墓制とが共存（④門 ⑫四ツ池）、C：区画墓と集落域が共存（⑤百間川沢田 ⑧七尾 ⑨東奈良 ⑩安満 ⑪田井中 ⑬池上曾根 ⑭山中 ⑮朝日）、D：区画墓と他の墓域と集落域が共存

(③龍川五条) のようにとりあえずは分類できる。

調査範囲による制約 Aは調査範囲が狭いため結果的に区画墓のみの検出に止まり、CやDのように調査範囲が広くなると同時期の集落や他の墓制が明らかになる場合が多い。なかには⑧七尾のように方形台状墓2基だけが調査された遺跡でさえ、谷を隔てた同時期の環濠集落（扇谷遺跡）の墓域と考えられる例もある。したがって、見かけ上AやBとなる例も、範囲を広げると集落域、生産域、墓域なども検出される可能性が高いと考える。となると、A～Dのように調査範囲に制約された遺構群の分類はあまり意味がない。その他の視点で墓地構成を考えるとしても資料不足である。

現状では、前期の区画墓について、③龍川五条遺跡や⑯山中遺跡の例から墓域と集落域の分離は認められるが、中期以降に比べて墓域が狭く集落域に近接している傾向がうかがえる程度といえる。

4. 区画墓の系譜

畿内成立説 弥生時代の区画墓、特にそれを代表する方形周溝墓については、前期に近畿地方で成立したという見解が多い。その根拠は、近畿地方の方形周溝墓が最も古いという点と同時期の大陸ではこのような墓制が一般的ではないという点にあった。

大陸の影響説 小田富士雄は、西日本における墳丘墓（区画墓）が縄文時代から維承されず弥生時代に出現した背景に中国の墳丘墓の影響を指摘する。⁵⁷⁾ 広瀬和雄も、方形周溝墓と縄紋時代晩期の墓とに深い断絶を認め、方形の墳丘という点に大陸からの系譜を想定する。

それらにしばしば引用されるのは、中国山西省侯馬市郊外喬村の戰國時代中期から前漢初頭の墓である。この時期は弥生時代初期とほぼ同時期であり、東西13.3m、南北10.5mという平面規模も方形周溝墓に類似する。しかし、2m離れて並ぶ2基の長方形土壙のうちやや大きい東側は長さ3.8m、幅2.8m、深さにいたっては5.1m、埋葬施設として木棺と木椁があり、玉や印など多くの副葬品も伴う。周溝に該当する部分は幅は1~1.4mだが、深さは2.3m特に深い部分では2.7mもあり、その中に奴隸と考えられる18人が埋められていた。土壙と周溝を同時存在と仮定し平面形が方形周溝墓に類似するとしても、土壙の規模特にその深さと、多数の殉葬の存在から、弥生文化の方形周溝墓とは似て非なるものである。喬村墓のように視覚的に方形周溝墓に類似する墓は、中国では普遍的ではない。むしろ方形を基調とした墓制の系列と奴隸の殉葬とが融合した特殊な例であろう。

区画墓の外来的要素 では大陸に祖型が求められないかというとそうではなく、近年韓国忠清南道保寧市寛倉里遺跡で方形周溝墓同様の墓約100基と住居跡群とが調査された。この墓の埋葬主体は木棺が大半で、周溝は一辺の中央を掘り残す型や四隅を掘り残す型などがある。時期は青銅器時代から三韓時代にかけてとされる。この他にも朝鮮半島では周溝墓の検出例が増加している様であり、時期によっては日本の方形周溝墓の祖型である可能性も出てくる。

また、墓制という変化しにくいものの中で区画墓が新たに成立する背景には、情報が伝わるだけではなくそれを担う人々の移動も考えたい。出土人骨を手掛かりとすると、渡来人的弥生人は北部九州から東海地方に分布する。渡来人にはより階層や職能の分化が進んだ当時の大陸の情勢を反映した多様性があると考えられる。⁶¹⁾ 最初期の区画墓には、北部九州に弥生時代前期前半の②東小田峯遺跡墳丘墓、近畿に前期古段階の⑥東武庫遺跡20号墓、その中間の中国地方では瀬戸内海側に前期中葉の③百間川沢田遺跡円形周溝²が、日本海側には突帯文期とされる④門遺跡円形周溝がある。すなわち、区画墓には成立当初から地域性がみられ、その背景には渡来人集団の差が反映された可能性がある。

木棺墓は弥生時代前期以降北部九州から近畿にいたる地域で一般化し、その後古墳時代にかけて発展的に展開する。この墓制は、縄文時代の例は僅少だが、朝鮮半島の無文土器文化に存在するので、縄文文化の石棺墓や土壙墓の伝統と大陸の木棺墓の伝播によって弥生時代に一般化したと考えられる。

区画墓の縄文的要素 縄文時代にも区画された墓がある。例外的ではあるが、後期後半頃の北海道中央部に分布する周堤墓（環状土籬・竪穴墓域）は極めて明瞭に区画されている。また、土壙墓や石棺墓の上部が埋められた埋葬主体の空間分だけ盛り上がっている例はしばしばみられる。さらに、弥生時代に比べて墓域と集落との接近や重複の度合いは強いものの、縄文時代でも個々の墓が規則性をもって一定の墓域内に営まれることは普通である。

区画墓の弥生的要素 弥生時代には墓域と集落との分離がさらに進行し、周囲に溝を巡らせる集落も出現した。また、定着した水稻農業は必然的に一定期間の土地利用を伴うため、生産域までも目に見える形で占有されるようになる。

普遍化する区画墓には、墓域を他と区画（隔離）し人体の埋葬に必要以上の面積を占有するという点で、基本的に遺体収容のスペース以上を占めなかつた縄文時代墓制からの飛躍がみられる。その他全国的に分布する土壙墓群や北部九州の壺棺墓群のような墓制も、地上標識や墳丘に匹敵する区画が想定されるように一定の群在なり規則性を有するものが一般的である。

西日本同時多発仮説 このように区画墓には、外来的（朝鮮半島の方形周溝墓？・渡米人・木棺墓）要素の比重が大きいが、縄文的（墓域を限定するという伝統）あるいは弥生的（土地を区画・占有）といった様々な要素も複合している。そして、前期の区画墓の分布範囲は、渡来人の弥生人、環濠集落、いわゆる遠賀川土器と共通する。

以上の状況からすると区画墓は、弥生文化を構成する諸要素と先進的諸地域における社会の同様な発展状況を背景として、弥生時代前期に、近畿地方のみならず北部九州・四国・中国・東海の諸地方において、同時多発的に成立した可能性がある。

その後の展開 瀬戸内沿岸から近畿地方にかけての初期の周溝墓では、墳丘中央に木棺が1基営まれる例が多い。数世代を経るうちに、近畿を中心とする地域では、この子孫の集団が区画墓を広く取り入れ家族（世帯）墓として営むようになったので埋葬主体は複数が主流となり、そのため新しい墓制である木棺と在来の墓制である土壙や土器棺がひとつの墳丘に混在するようになる。

北部九州地方の区画墓は、成立当初から埋葬主体が複数営まれ他地域と様相を異にする。区画墓は中期以降も築かれるが近畿地方ほど一般化せず、前期後半から後期前半にかけては壺棺墓制が独自の展開をする。

5.まとめ

弥生時代前期区画墓の概要 前期の区画墓（周溝墓・台状墓・墳丘墓）は、18遺跡約60基ある。

立地は、微高地や自然堤防が多いが、近畿地方の日本海側のように尾根や丘陵の例もある。

墳丘の平面形は、方形周溝墓では長方形を基本とするが隅丸や歪んだ形態もある。面積は、11m²から約230m²に及ぶ。平面形や面積については、現状では地域や小時期による差は判然としない。

盛土は、⑥東武庫遺跡の推定値では50cmである。一方、丘陵上の⑧七尾遺跡の方形台状墓や尾根上の⑦駄坂・舟隠遺跡の周溝墓群は地山削り出しによって形成している。

埋葬主体は、九州地方ではひとつの墳丘に多数存在し、瀬戸内海沿岸では円形周溝墓の中央に木棺を

1基営んでいる。近畿地方北部や西部では墳丘中央部に木棺などを1~3基埋葬するが、中心埋葬の明確な例が多い。これら区画墓の埋葬主体は在地の区画されない墓制と同様である。埋葬主体は墳丘長軸に平行する場合が一般的だが、墳丘自体は地形の制約により任意の方針を向いている例が多い。埋葬主体は、極端に深いものはない。なお、前期では埋葬人骨も周溝内埋葬施設も未発見である。

周溝の平面形には地域差があり、近畿地方では全周する型が、東海地方では四隅を掘り残す型が卓越する。断面形はU字形ないし逆台形を呈する。

供獻土器を伴うものは多いが、副葬品や着裝品は少ない。埋葬主体から土器以外が出土したのは8例あり、うち6例から石鏃が出土した。他には磨石片1例、堅櫛1例、管玉125個以上が1例ある。周溝からも石器の出土が比較的多く、石鏃のみならず磨製石器や楔形石器など変化に富む。

墓域と集落域の分離は認められるが、墓地構成を検討するには前期の区画墓は資料不足である。

弥生時代前期区画墓の系譜 区画墓は弥生時代前期には成立し、古墳時代前期までに東北地方から九州地方にまで拡散する。

区画墓の系譜について、近畿地方で方形周溝墓が成立したという考えが一般的であった。しかし、朝鮮半島における方形周溝墓状墓制の存在、渡来人の影響、成立当初から周溝墓・台状墓・狹義の墳丘墓と若干形態を異にするよう地域性が現れている点、墓域を限定しない区画するという縄文時代からの伝統、土地を占有する弥生時代の社会状況、以上の複合的状況を背景として、西日本の諸地域において区画墓が同時多発的に成立した可能性が考えられる。

第12章第2節 注

- 1) 大場哲雄 1964 「東京都八王子発見の方形周溝特殊遺構」 『日本考古学協会三十九年度大会研究発表要旨』
- 2) 鈴木敏弘 1976 「北陸地方 まとめ」 『原史墓制研究』4 原史墓制研究会
- 3) 近藤義郎 1977 「古墳以前の墳丘墓」 『岡山大学法文学部学術紀要』第37号(史学篇)
- 4) 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」 『考古学研究』第26巻第3号
- 5) 都出比呂志 1986 「墳墓」 『日本考古学』第4巻 集落と祭祀 岩波書店
- 6) 石野博信 1983 「古墳出現期の具体相」 『関西大学考古学研究室開設記念年記念 考古学論叢』 関西大学
- 7) 近藤義郎 1986 「前方後円墳の誕生」 『日本考古学 第6巻 変化と画期』 岩波書店
- 8) 田代克己 1987 「9 墓地 6. 方形周溝墓」 『弥生文化の研究 第8巻 祭と墓と裝い』 雄山閣
- 9) 藤田憲司 1987 「9 墓地 7. 方形台状墓」 『弥生文化の研究 第8巻 祭と墓と裝い』 雄山閣
岩松 保 1996 「山地の墓、あるいは平地の墓」 『京都府埋蔵文化財論集 第3集』 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 10) それぞれの概念規定は一理あり、なかでも「墳丘墓」が最もこの種の墓制の本質をよく表していると考える。しかし、從来使われてきた狹義・広義の墳丘墓概念もありそれらとの混同も起こり得、また「弥生時代前期の弥生墳丘墓」といった表現も避けたいので、総称としては「区画墓」を使用する
- 11) 中山平次郎 1917 「銅鉢銅劍の新資料」 『考古学雑誌』第7巻第7号
- 12) 柳田康雄 1986 「III. 弥生時代 6. 集団墓地から王墓へ」 『図説 発掘が語る日本史 第6巻 九州・沖縄編』 新人物往来社
- 13) 香川県埋蔵文化財調査センターほか 1996 『龍川五条遺跡』
- 14) 島根県教育委員会・島根県埋蔵文化財調査センター 1996 『門遺跡』
- 15) 岡山県教育委員会 1993 『百間川沢田遺跡3』
- 16) 兵庫県教育委員会 1995 『尼崎市東武庫遺跡』
- 17) 豊岡市教育委員会・糸岡市立郷土資料館 1989 『駄坂・舟置遺跡群』
- 18) 蜂山町教育委員会 1982 『七尾遺跡発掘調査報告書』

- 19) 埋蔵文化財研究会 1982 『第11回埋蔵文化財研究会 西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題<資料>』
京都予備校文化財資料室開設記念 刊行年不明 『六勝寺跡』(パンフ)
- 20) 東奈良遺跡調査会 1977 『東奈良遺跡第7回現地説明会資料(G-4-G・K地区)』・未見
- 21) 埋蔵文化財研究会 1982 『第11回埋蔵文化財研究会 西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題<資料>』
- 22) 森田克行 1990 「摂津地域」 「弥生土器の様式と編年 近畿編II」 木耳社
- 23) 東奈良遺跡調査会 1974 『東奈良遺跡現地説明会資料』
- さらに、藤沢真依は「第1様式例は七基確認されているが、埋葬主体の検出されたものは一基である。」とする
〔藤沢真依 1987 「近畿地方の方形周溝墓」 『文化史論叢(上)』 創元社〕が、その前期第1号墓からは埋
葬主体として壺棺1基が検出されているものの、全体の規模や形態は不明である。
- 24) 大阪府教育委員会・高槻市教育委員会 1972 『安満遺跡発掘調査概要』
- 25) 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1986 『龜井(その2)』
- 26) 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1992 『河内平野の動態V』
大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1993 『河内平野の動態VI』
- 27) 大阪府文化財調査研究センター 1997 『田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)』(本書)
- 28) 四ツ池遺跡調査会 1974 『現地説明会要旨 第1回』・未見
- 29) この方形周溝墓は、「I-11の方形周溝墓」[石神怡 1977 「池上弥生ムラの変遷」 『考古学研究』第23卷
第4号] や「S H-0125号墓」[岸本一宏 1987 「畿内弥生社会構造に関する一考察」 『文化史論叢(上)』
創元社] と呼ばれることもあるが、同一遺構である
- 30) 第2阪和国道内遺跡調査会 1971 『昭和46年度 第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書4』
- 31) 大橋信秀 1978年 「第III部 発掘と調査 25-27 服部遺跡」 『日本考古学年報29(1976年版)』 日本考
古学協会
- 32) 滋賀県文化財保護協会 1979 『服部遺跡発掘調査概報』
- 33) 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1986 『服部遺跡発掘調査報告書II』
- 34) 小沢毅・深澤芳樹 1995 「I 平城京の調査 I 右馬寮の調査 第246次」 『1994年度 平城京発掘調査
部発掘調査概報』 奈良国立文化財研究所
- 35) 奈良県立橿原考古学研究所 1986 「田原本町 多遺跡 第11次発掘調査報告書」 『奈良県遺跡町概報 1985
年度(第2分冊)』
- 36) 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990 「VI 松ノ木遺跡」 『一般国道23号線 中勢道路 埋
蔵文化財発掘調査概報II』
- 37) 愛知県埋蔵文化財センター 1992 『山中遺跡』
- 38) 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡I~IV』
- 39) 愛知県埋蔵文化財センター 1991 『朝日遺跡I』
- 40) 念のため、『県報告』と『センター報告』とを比較しておく。ともに正誤表が添付され、以下取り上げる部分に
ついて訂正是ないが、『セ』の西部地区図版6/西⑤のS Z042とS Z043とは番号に入れ替わっていると判断され
る。
- 『県』S X140は、『県 III(遺構図版版)』の検出遺構一覧(8頁)では「東西5.0m×南北不明、形態A(周
溝の四隅が切れて陸橋となっているもの)、西志賀期(前期後業)」などのデータが掲載され、さらに『県 IV
(土器図版図)』の図版80-1496には前期末の壺形土器が図示されている。この周溝の四隅が切れた平面形は、
『県 I(本文篇1)』の「第6図・方形周溝墓形態分類」(94頁)や『県 III』図版99のS X140とも一致する。
一方、『セ』の遺構一覧表(181頁)でS Z042は、「長軸480×短軸480cm、II期(朝日期=中期前業)、形態A 4
(周溝の四隅が切れる)」となる。『県』と比較すると、形態は同じ(ただし分類記号は異なる)だが、規模が若
干異なり、時期が前期から中期へ下げられている。
- 41) 山岸良二 1981 『方形周溝墓』 ニュー・サイエンス社
- 42) 肥後弘幸 1991 『丹後地域の弥生墓制』 『京都府埋蔵文化財論集 第2集』 京都府埋蔵文化財調査研究セ
ンター

- 43) 藤沢真依は、方形周溝墓の短軸／長軸=0.8を境に長方形と正方形（に近いもの）とに分ける〔藤沢真依 1987 「近畿地方の方形周溝墓」 『文化史論叢（上）』 創元社〕。この視点は簡便にして有効なのでこれに倣う。
- 44) 佐賀県教育庁 1992 『吉野ヶ里』
- 45) 『朝日新聞 名古屋版』 1997年11月14日
- 46) 愛知県埋蔵文化財センター 1991 『朝日遺跡I』
- 47) 山田清朝 1995 「第6章 遺構のまとめ 第1節 周溝墓」 『東武庫遺跡』 兵庫県教育委員会
- 48) 瓜生堂遺跡調査会 1981 『瓜生堂遺跡III』
- 49) 中野益男・中野寛子・長田正宏 1995 「東武庫遺跡から出土した遺構に残存する脂肪酸の分析」 『東武庫遺跡』 兵庫県教育委員会
- 50) 瓜生堂遺跡調査会 1981 『瓜生堂遺跡III』
- 51) 永島輝臣慎・田中清美 1985 「大阪市加美遺跡の弥生時代中期墳丘墓」 『月刊文化財』 266号
- 52) 山岸良二 1981 『方形周溝墓』 ニューサイエンス社
高橋信明 1982 「愛知県内の方形周溝墓」 『第11回埋蔵文化財研究会 西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題＜資料＞』
愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡I～IV』
- 53) 大塚初重・井上裕弘 1969 「方形周溝墓の研究」 『駿台史学』第24号
澤田大多郎 1980 「方形周溝墓の展開」 『東アジア世界における日本古代史講座 第1巻 原始日本文明の系譜』 学生社
石黒立人 1987 「伊勢湾周辺地域における方形周溝墓出現期の様相」 『マージナル』 No.7
前田清彦 1991 「方形周溝墓平面形態考」 『古代文化』第43巻第8号
- 54) 前田清彦 1991 「方形周溝墓平面形態考」 『古代文化』第43巻第8号
- 55) 一瀬和夫 1985 「方形周溝墓・方形台状墓 そして古墳」 『歴史論文集 乾』 末永先生壽記念会
- 56) 丹後町教育委員会 1983 『丹後大山墳墓群』
- 57) 小田富士雄 1991 「弥生時代墳丘墓の出現」 『古文化論叢』 児嶋隆人先生壽記念事業会
- 58) 広瀬和雄 1997 『縄紋から弥生への新歴史像』 角川書店
- 59) 山西省文物管理委員会・山西省考古研究所「侯馬東周殉人墓」 1960 『文物』1960年第8・9期・未見
山西省文物工作委員会等作小組 1972 「侯馬戰国奴隸殉葬墓の發掘——奴隸制度の罪証」 『文物』1972年第1期
- 60) 高麗大学校埋蔵文化財研究所・大字 1997 『竈倉里周溝墓』・未見
寺井 誠 1998 「1997年の考古学会の動向 韓国」 『考古学ジャーナル』第431号
- 61) 本間元樹 1991 「支石墓と渡来人」 『古文化論叢』 児嶋隆人先生壽記念事業会
- 62) ただし、弥生時代の木棺墓の検出はここ30年程のことなので、縄文時代の木棺が今後発見される可能性もある。

第3節 田井中遺跡95-2区 落込み848出土の前期弥生土器

1. はじめに

落込み848は、95-2区第3面で検出した遺構であり、そこに含まれた約17000点（小破片含む）を数える土器のほぼ全てが、弥生時代前期に属するものである。その検出状況から察すると、落込み848から出土した土器群は、他の生活廃棄物と共に、地形の窪んだ場所へある一定期間継続して廃棄されたものであり、いわゆる「一括」と称される資料ではない。しかし、落込み848から出土した大量の遺物は、当該期の河内地域を考える上で多くの情報を提供してくれる。ここでは、落込み848から出土した弥生時代前期土器に焦点を絞り、整理・集計した結果を論述する。

2. 整理・集計作業の経過

落込み848から出土した大量の土器は、95・96年度の調査期間中に基本整理（洗浄・注記・接合）と遺物実測を行った。報告書作成作業に入り、落込み848から出土した土器を把握する必要に迫られ、集計作業を行う事とした。

落込み848は最大幅約8m、最深部約70cmをかる遺構であり、大量の土器が積み重なって広範囲に分布している。しかしその分布状況は当然の事ながら一様ではなく、特に北と南の2地点で集中する事が看取される。本報告書ではそれぞれの土器群を表す呼称として、便宜上「北土器群」・「南土器群」を用いる事とした。南土器群はその範囲が明確でなく、集計作業の結果、調査時において土器を取り上げる際に用いた4mメッシュの区割りでは、周辺に散在する土器との明瞭な差異（器種構成や時期等）を見出す事はできなかった。したがって、ここでは南土器群と周辺に散在する土器とを総合して「落込み848出土土器」と称して報告する事とした。一方、北土器群に関しては、落込み848から出土した他の土器群に比べ、レベル的にやや低い窪みからまとまって出土し、上下2層に分層して土器を取り上げ事が可能だったので、「北土器群出土土器」と称して集計・報告する事とした。

3. 器種構成

器種構成を導き出す為にカウントするのは、完形品と口縁部が残存しているもの（3cm以下的小破片含む）に限った。なお、蓋類は破片の部位に関係なく数える事とした。胎土に関しては、肉眼で明らかに生駒西麓産と判断したものと、その他の胎土を有するもの（非生駒西麓産）とを区別し、判断しかねるものに関しては後者に含めた。

落込み848の器種構成（表18）は、壺類（a1、a2、大型壺、ミニチュア、無頸壺A・B）が全体の52.6%を占め、他の器種を圧倒している。壺と対比してもその出土点数は約2倍に達し、河内平野に位置する同時期の遺跡に比べ、壺の比率が高い事を指摘できる。

北土器群上層の器種構成（表19）は、壺類56.7%・甕30%・鉢13.3%となり、落込み848同様、壺の比率が高い。また、器種のバラエティに乏しい事が看取られる。

北土器群下層の器種構成（表20）は、壺類65.3%・甕17.4%・鉢4.3%・甕蓋8.7%・壺蓋4.3%で、落込み848及び北土器群上層以上に壺の比率が高い。

次に胎土についてであるが、全体的に生駒西麓産の比率が低い事を指摘できる。肉眼による識別などで、誤認している場合が無いとも限らない。また、実際に集計作業を行っていると、どちらとも判断の

表18 落込み848出土土器種構成一覧

	生駒	非生駒	合計	%
壺a1		4	4	
壺a2	5	42	47	789 49.9
不明	38	700	738	
大型壺		34	34	34 2.1
ミニチュア壺		5	5	5 0.3
無頸壺A		1	1	
無頸壺B		2	2	4 0.3
不明		1	1	
鉢A	1	20	21	
鉢B	8	144	152	185 11.7
不明		12	12	
高杯		1	1	1 0.1
甕A	17	344	361	
甕B		2	2	443 28.0
不明	1	79	80	
壺蓋A		6	6	
壺蓋B	2	11	13	
壺蓋C	1	6	7	79 5.0
壺蓋D		4	4	
不明	5	44	49	
甕蓋	1	39	40	40 2.5
不明		2	2	2 0.1
合計	79	1503	1582	
%	5.0	95.0	100	

表19 北土器群（上層）出土土器種構成一覧

	非生駒	合計	%
壺a2	8		
不明	8	16	53.4
無頸壺B	1	1	3.3
鉢B	4	4	13.3
甕A	9	9	30.0
合計		30	100

表20 北土器群（下層）出土土器種構成一覧

	生駒	非生駒	合計	%
壺a2	1	4	5	13 56.6
不明	1	7	8	
大型壺		2	2	8.7
鉢B		1	1	4.3
甕A	1	3	4	17.4
壺蓋B		1	1	4.3
甕蓋		2	2	8.7
合計	3	20	23	
%	13.0	87.0		100

つかないものが存在した事も事実である。しかし、今回報告する田井中遺跡出土の土器に限っては、全時期に渡って生駒西麓産の胎土を有するものが少なく、大幅な誤りは無いものと考えている。

4. 文様

壺a1・a2、甕A、鉢の完形はもちろんの事、文様が残っている破片に関してカウントし、壺に関しては頸部文様と体部文様に分けた。ただし、破片でも3cm以下のものは数に含めなかった。

文様の分類は主として佐原の行った分類に準ずる事とし、条数が1～3条は少条、4条以上は多条とする。なお破片の為、条数が3条以下か4条以上であるのか判断しかねるものについては3条以下とし、少条に含めた。

削り出し突帯は低く偏平なものが多く、両端をハケあるいはミガキなどで段差を付ける、井藤のいう「c手法」²⁾を用いているものが多数を占める。その内において、沈線帯の上下一方のみを「c手法」で削り出し、段をつくりだしたもののが散見できた。この段と組み合う沈線は通常2～3条であるが、まれに4条以上に達するものもある。ここでは、このような文様を示す場合には、上下どちらを削っているのかわかるように、「上ののみ削り出し」・「下のみ削り出し」と称する事とした。なお、破片資料である為に文様が完結せず、「削り出し突帯」であるのか「上ののみ削り出し」・「下のみ削り出し」であるのか不明な場合は、全て「削り出し突帯」に加える事とした。

壺a1・a2〈口縁端部文様〉落込み848と北土器群上層・下層出土土器を合わせて概観すると、口縁端部文様には刻み目・沈線1条・刻み目+沈線・無文があり、その内無文が87%を占める。沈線1条は10%、刻み目と刻み目十沈線はどちらも1%に満たない。

〈頸部文様〉落込み848から出土する壺の頸部文様（表21）をみると、削り出し突帯第II種少条が全体の42%を、次いで沈線少条が29%を占めていることがわかる。その他の文様は全て10%未満となっており、一見バラエティーに富んでいる様にみえる頸部文様も、その構成に偏りを有する事がわかる。また、沈線の条数は2～4条が主流であり、5条を越えるものはほとんどみられない。

頸部に段を有する壺の内4点は壺a1であり、落込み848から出土する壺a1の全てがこれに当たる。段は、粘土接合時に生じる高低を段としたものである。形態からもわかるように、これらは壺a2に比

表21 落込み848出土壺a1・a2 (+不明) 頸部文様

胎 土	口 縁 端 文 様	段		上ののみ削出		下のみ削出		削出突帯		沈 線 文		貼付突帯		他文様		合 計	% 合 計	
		+	沈少 線条	+	沈多 線条	+	沈少 線条	I 種	II 種	少条	II 多 種	少条	多 条	少条	多 条			
								+文 様	+文 様	+文 様	+文 様	+文 様	+文 様	+文 様	+文 様			
生	有																	
無	1																	
駒	不 明																	
非	有																	
生	無																	
駒	不 明																	
合 計	14	5	2	5	18	2	199	3	20	135	3	35	1	12	21	1	1	477
%	2.9	1.0	0.4	1.0	4.2	42.3	4.2	29.0	7.6	7.0	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	100	

*①-刻み目2 *②-貼り付け突帯少条1 *③-一竹管文1・円形刺突文1 *④-円形刺突文1

*⑤-貼り付け突帯少条+刻み目1・貼り付け突帯少条1 *⑥-貼り付け突帯少条1+刻み目1

*⑦-円形刺突文1 *⑧-円形刺突文2 *⑨-貼り付け突帯少条1 *⑩-円形刺突文1 *⑪-刻み目1

*⑫-刻み目1 *⑬-刻み目5 *⑭-刻み目13 *⑮-刻み目1 *⑯-乳状突起1

表22 北土器群（上層）出土壺a1・a2 (+不明) 頸部文様

胎 土 種 文 様	口 縁 端 文 様	削出突帯				沈線文	貼付突帯	他文様	合 計	% 合 計
		II 種 少 条	少 条	多 条	少 条					
非 生 駒	無	3 ※①			1	2 ※②	6	54.5		
	不明	2	1	2			5	54.5		
合 計		5	1	2	1	2	11			
%		45.6	9.1	18.1	9.1	18.1		100		

※①一貼り付け突帯少条1 ※②-乳状突起2

表23 北土器群（下層）出土壺a1・a2 (+不明) 頸部文様

胎 土 種 文 様	口 縁 端 文 様	削出突帯				沈線文	貼付突帯	他文様	合 計	% 合 計
		II 種 少 条	II 種 多 条	少 条	少 条					
非 生 駒	不 明								1	1
	有	1				1		1	3	21.4
非 生 駒	無	1				2		1	4	28.6
	不明	1	1	3		1			6	42.9
合 計		3	1	6		4		14		
%		21.4	7.1	42.9		28.6			100	

古い要素を有しており、図51-600の段にヘラミガキ調整後の縁取沈線がみられる事も古い要素の1つに挙げられるだろう。しかし、壺a1は落込み848の内において主要な位置を占めておらず、出土点数も数点に止まる。頸部に段をめぐらすものには、壺a1のほか壺a2でも数点認められるが、それには粘土接合時に生じる高低を段とするもののほか、ハケあるいはミガキなどで段を形成するものが多くみられる。口縁部はa1に比べて大きく発達し、細孔を有するものが多く、他の壺a2と形態的にはほとんど変わりがない。

次に、北土器群（表22・23）であるが、上層・下層共に出土する土器数が少ないため、文様構成に顕著な隔たりは見出せない。一方、上層・下層共に共通している事は、沈線文の条数・貼り付け突帯の条数共に1~3条が主流となる事である。ただし、沈線文でその条数が4条以上となるものは、上層でしか見出せない。落込み848と顕著に異なる点は、段・「上ののみ削り出し」・「下のみ削り出し」を有するものが皆無である点であろう。

〈体部文様〉落込み848（表24）から出土する土器の内、壺の体部破片で文様を有しているものは、1142点を数える。その内、削り出し突帯第II種少条が34.8%を沈線文少条が26%を占め、次に沈線文多条が13%となっている。その他の文様は全て10%未満であり、当然ではあるがその文様構成は頸部文様とほぼ同様な傾向を示す。また、沈線の条数も頸部文様同様である。

次に、北土器群（表25・26）だが、上層の頸部土器片に対して、体部土器片の少なさが目に付く。上層・下層共に文様構成には著しい隔たりが認められない。落込み848との顕著な違いは、「段」・「貼り付け突帯」がみられない事であろうか。

上記の様に、落込み848及び北土器群上層・下層出土の壺a2における主要な文様は、頸部・体部ともに削り出し突帯第II種少条である事がわかる。削り出し突帯は前述した様に低く偏平で、その形成法は沈線帶の両端をハケあるいはミガキなどで段差を付ける、井藤のいう「c手法」を用いているものが多い。また、少数ではあるが頸部・体部共に沈線帶の上下どちらかを「c手法」で低めている

表24 落込み848出土壺a1・a2 (+不明) 体部文様

胎	口縁端部文様	段	上ののみ削出		下ののみ削出		削出突帯				沈線文			貼付突帯		他文様		合計	%			
			十 沈 線 少 条	十 沈 多 条	十 沈 線 少 条	十 沈 多 条	I 種	II 少 種	II 多 種	少 条	多 条	少 条	十 文 様	十 文 様	十 文 様	十 文 様						
土																						
生	有														1							
駒	不 明	2	9					22	2 ※ ③	6	12	1 ※ ⑦	11		2	4 ※ ⑩	1 ※ ⑬	72	6.3			
非 生 駒	有									2 ※ ⑤	1							3	0.3			
不 明	無				1	1	2	1		2		1			1 ※ ⑪	1 ※ ⑭	10	0.9				
合計		7	66	6	16	12	4	17	5	384	13	91	1	267	30	139	11	27	39	7	1142	
%		0.6	6.3	1.4	1.0	0.4	1.9			34.8	8.1		26.0		13.1	5.8	0.6			100		

※①—重弧文2・三角形刺突文1・刻み目3 ※②—山形文2・有輪羽状文1・刻み目2

※③—山形文1・刻み目1 ※④—刻み目4・円形刺突文2・乳状突起1・赤彩文1・斜格子文1・竹管文2

※⑤—沈線少条+刻み目1 ※⑥—円形刺突文1 ※⑦—刻み目1

※⑧—乳状突起6・有輪羽状文1・山形平行斜線文2・竹管文2・斜格子文1・重弧文1・円形刺突文2・山形文1・木葉文1 刻み目12

※⑨—乳状突起2・円形刺突文1・竹管文1・斜格子文2・山形平行斜線文1・羽状文1・有輪羽状文1・山形文1・刻み目1

※⑩—刻み目4 ※⑪—刻み目1 ※⑫—布目庄痕5・流水文1・刻み目28 ※⑬—乳状突起1 ※⑭—乳状突起1

※⑮—赤彩文1・山形平行斜線文1・重弧文3

表26 北土器群(下層)出土壺a1・a2 (+不明) 体部文様

表25 北土器群(上層)出土壺a1・a2 (+不明) 体部文様

胎	口縁端部文様	削出突帯	
		II種少条	
土	不明	2	

胎	口縁端部文様	上ののみ削出		削出突帯		沈線文			合計	%
		十 沈 線 少 条	II 少 種 条	II 少 種 条	III 多 種 条	少 条	多 条			
生	不 明		2					1		
駒	不 明								3	27.3
非 生 駒	不 明				3	1	3	1	8	72.7
合計			2		3	1	4	1	11	
%			18.2		27.3	9.1	36.3	9.1		100

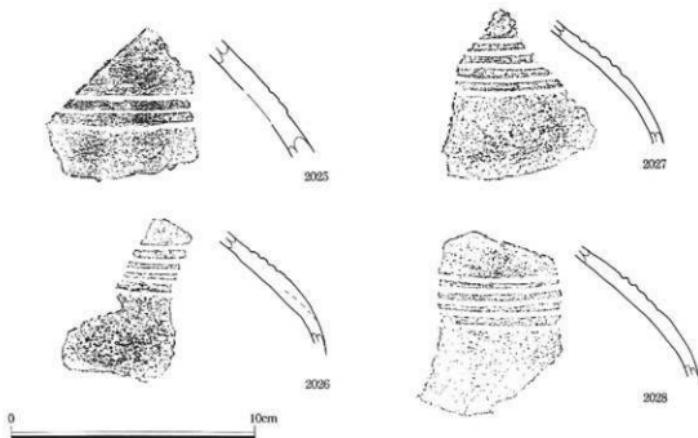


図236 落込み848出土壺体部破片（沈線帯の下のみ削っている例）

場合があり、ここでは従来「段十沈線」とされていた文様とは切り離して考える事とした。その理由は、通常の「段」とは頸部の場合「段」の上に沈線が、体部の場合は「段」の下に沈線が数条めぐっているのが本来であるが、落込み848出土のものに限っては、その逆も存在している事である（図236-2025～2028）。これは、本来の「段」が有する区分文様としての機能が不明瞭になっているとするよりも、削り出し突帯第II種の片側のみ削り取る作業を省略、あるいは削り出し突帯が退化したものと考えられる。実際、落込み848から出土する壺a2に施文される沈線文帯と組み合う「段」には、明確な段差を有しているものが多い。また、削り出し突帯の中にはその削り出しが明瞭でなく、一見すると沈線文帯と判断してしまう資料が多くみられた。この事は削り出し突帯から沈線文多条へと、新しい文様を創出しようとする混沌とした状況を表していると考えられる。

壺a2で頸部・体部共に、2種類以上の文様が組み合わせて施文されている例がある。削り出し突帯と貼り付け突帯、沈線と貼り付け突帯、沈線と削り出し突帯などのはか、段・削り出し突帯・沈線・貼り付け突帯などの主文様と他文様（竹管文・円形刺突文・刻み目・乳状突起・三角形刺突文・重弧文・山形文・有軸羽状文・羽状文・山形の平行斜線文・斜格子文・木葉文・布目圧痕文・流水文・赤彩文）の組み合わせも少數はあるが存在する。

壺A〈口縁端部文様〉落込み848と北土器群上層・下層出土のものを合わせて述べると、壺Aには刻み目・刻み目十沈線・無文があり、刻み目が79.5%、無文が20%、刻み目十沈線が0.5%を占める。

〈頸体境文様〉落込み848（表27）出土の壺A（+不明）の頸体境文様は、沈線文少条が72%を占め、他の文様を圧倒している。沈線の条数は2～3条がほとんどで、1条のものは少ない。また、無文のものが12.6%みられる。口縁端部に刻み目を有するものが52.2%、刻み目の無いものが16.8%ある。すなわち、口縁端部に刻み目がめぐり、頸体境に2～3条の沈線文帯を配置する壺が全体のほぼ4割を占めているといえる。

北土器群（表28.29）出土のものについては、落込み848同様沈線文少条が主体を占めている。また、下層では沈線少条のみであるが、上層になると多条のものが出現している事がわかる。

表27 落込み848出土壺A (+不明) 頸体境文様

胎 土	刻 み 目	無 文	段	上ののみ削出		下のみ削出		削出突帯		沈 線 文		合 計	%
				+ 沈 線	少 条	+ 沈 線	少 条	I 種	II 少	少 条	多 条		
								文 様	文 様	文 様	文 様		
生 駒	有	2								7	2		11 2.0
	無	2								2	1		5 0.9
	不明							1	8	3		12	2.1
非 生 駒	有	34	2	1		4		2	207	4 ※(2)	24	3 ※(4)	281 50.2
	無	29	2					1	49		8		89 15.9
	不明	4		2				1 ※(1)	5	117	9 ※(3)	22	2 ※(5)
合 計		71	4	3		4		1	9	390	13	60	5 560
% %		12.7	0.7	0.5		0.7		0.2	1.6	72.0		11.6	100

※①一斜格子文 1 ※②一山形平行斜線文 1・円形刺突文 1・刺目 2

※③一山形平行斜線文 4・竹管文 2・刺目 2・山形文 1 ※④一竹管文 3

※⑤一竹管文 1・円形刺突文 1

表28 北土器群（上層）出土壺A (+不明) 頸体境文様

胎 土	刻 み 目	削出突帯		沈 線 文		合 計	%
		II種少条	少 条	多 条	文 様		
非 生 駒	有		5		2	7	70.0
	無			1 ※(1)	1	2	20.0
	不明	1				1	10.0
合 計		1	5	1	3	10	
% %		10.0	60.0	30.0		100	

※①一円形刺突文 1

表29 北土器群（下層）出土壺A (+不明) 頸体境文様

胎 土	刻 み 目	沈 線 文		合 計	%
		少 条	少 条		
生 駒	有		1	1	11.1
	不明		2	2	22.2
	有	1	1	1	11.1
非 生 駒	無	2	2	2	22.2
	不明	3	3	3	33.3
	合 計	9	9		

表30 落込み848出土鉢類体境文様

口縁端文様	胎	鉢 A			鉢 B			不明						合計	%合
		下のみ削出		沈線	上のみ削出		沈線	上のみ削出		沈線	文	削出突帯			
		+	沈縁	少	+	沈縁	少	+	沈縁	少	多	I	II		
生	無		1		4			5	1						11 3.4
	不明							3					2		5 1.6
非 生	有		1		1			11	1						14 4.4
	無	2	8		58	1	2	106	12		1		1		193 60.3
	不明	4	1				2	18	3	2	1	1	1	46	3 1 13 97 30.3
合計		2	14	1	63	1	4	145	17	2	2	1	1	1	49 3 1 13 320
%		0.6	4.4	0.3	19.7	0.3	1.3	45.4	5.3	0.6	0.6	0.3	0.3	15.3	0.9 0.3 4.1 100

表31 北土器群（上層）出土鉢類体境文様

胎	口縁端文様	鉢 B			合計	%合		
		沈線		少 多 条				
		文	条					
非 生	有	1			1	25.0		
	無	1	1	1	3	75.0		
合計		2	1	1	4			
%		50.0	25.0	25.0	100			

表32 北土器群（下層）出土鉢類体境文様

胎	口縁端文様	不明			削出突帯	%合		
		沈線		少 多 条				
		文	条					
非 生	不 明					1		

鉢〈口縁端部文様〉落込み848と北土器群上層・下層出土のものを合わせて述べると、鉢には刻み目がめぐるものと、無文のものとがあり、全体の内88.5%を無文が占める。

〈頸体境文様〉落込み848（表30）出土鉢の内、鉢A5.3%、鉢B72.6%、不明22.1%で、鉢Bが主要な位置を占めている事がわかる。鉢Bの内でも特に口縁端部の文様が無く、頸体境に沈線が2~3条めぐっているものが多い。

北土器群（表31・32）では相対的に鉢の出土が少なく、上層で4点、下層で1点となっている。

5. 落込み848及び北土器群出土土器の時間的位置付け

落込み848出土土器は、時間的に幅のある土器群であると看取されるが、少数派である古~中段階前半の資料を除くと、大多数の土器が次のような傾向を示す。

①壺a 2の頸部段には、沈線の下部をヘラあるいはミガキなどの工具で低く削り取るものが多く、口縁部の形態を見る限り、削り出し突帯・貼り付け突帯を有する他の壺と大きく異なる要素は認められない。

- ②紐孔を有する壺が一定量含まれる。
- ③壺a 2は、削り出し突帯第II種少条・沈線文少条が多数を占めるが、貼り付け突帯や沈線が多条化しているものも若干含まれる。
- ④黒色物質を塗布し、彩文を施す壺が少ない。

以上の点などから、落込み848は佐原編年第I様式中段階後半～新段階前半、井藤編年I-c段階～II-a段階に相当する土器群であると考えられる。

次に、北土器群上層・下層出土土器についてであるが、予想に反して集計の結果からは当初考えていたような上層と下層との時期差はほとんど認められなかった。壺の頸体境にめぐらる沈線文の条数が異なっていたり、上層から無頸壺Bが出土しているなど若干の差異はあるものの、二期間に区分し得るほどのものではない。全体的にみると、段を有する資料が皆無であり、新段階まで下る資料がほとんど見出せないなど、落込み848に比べて土器の廃棄期間が短かったと考えられる。すなわち、北土器群上層・下層出土土器は、佐原編年第I様式中段階後半、井藤編年I-c段階に属す土器群であると看取される。

田井中遺跡95-2区出土の弥生時代前期土器は、落込み848及び北土器群上層・下層出土のものを始めとして、決して良好な資料とはいえない。しかし落込み848同様、河内地域弥生時代前期土器の編年に用いられている資料の多くが、自然流路・溝・落込み等の遺構から出土しているものであり、これら時期幅を有する資料を用いることでしか、編年を組み立て得ない状況であった。ところがここ数年の間に、巨摩・若江北遺跡第5次調査、田井中遺跡北濠地区⁴⁾の調査等で、当該期の良好な資料が多く出土するようになった。今回報告した資料は、巨摩・若江北、田井中北濠地区で得られた資料とは異なり、その殆どが落込み及び溝からの出土である。しかし、表33で示す様に既出の資料と対比すると、ある時期の空白を埋める可能性をもつ土器群である事がわかる。田井中遺跡95-2区落込み848出土壺は、山賀遺跡河川7（中層）⁵⁾出土のそれに比べると、①黒色物質を付着し赤彩文を施すものが殆どみられない。②明瞭な段を有する資料が少ない。などの理由により、新しい要素を有していると思われる。一方、美園遺跡B SK230・241・260から出土する口縁部が著しく発達し、沈線文・貼り付け突帯共に多条化している壺をみると、明らかに落込み848出土資料の方が古いことがわかる。

ここで、問題になるのが龜井遺跡SD1401及びSK1601出土土器である。廣瀬和雄の編年によると、SD1401は前期2に、SK1601は前期3に分けられている。しかし、SD1401及びSK1601共に共通した要素をもつ部分が多く、特にSD1401は時期幅をもつ資料であるといえる事から、なにをもって二期に区分するのか不明瞭な部分が多い。SD1401出土壺の中に、「退化的な削り出し突帯」が存在し、削り出し突帯上の沈線が1～5条で収まる事や、SK1601の中に初源的な貼り付け突帯がみられる事から、95-2区落込み848出土資料と同時期、あるいはSD1401・SK1601共に段を有する壺が少なく、壺の頸体境の沈線が多条化し、壺Bが出現している事からすると、やや新しい傾向を示す資料であるといえる。

6. 土器からみた田井中遺跡弥生時代前期集落の変遷

從来から指摘されている様に、田井中遺跡弥生時代前期の集落は北濠地区と正門西区の2ヶ所に大別できる。北濠地区では、遺構・遺物の検討から集落の変遷を三時期に細分しており、集落が終焉に向かう時期である第3期に、正門西区へとその中心が移動したとされる。¹⁶⁾ 北濠地区と正門西区から出土する土器を比べると、北濠地区の方がより古い様相を呈しているのは明らかである。また、北濠地区第2期・

表33 弥生時代前期土器編年対照

佐原 ¹⁾ (1968)	井藤 ²⁾ (1983)	寺沢・森井 ³⁾ (1989)	主な既出資料	田井中遺跡 ⁴⁾	突帯文 土 器
古段階	a	I-1	☆巨摩・若江北遺跡第5次 ⁵⁾ ☆鬼塚遺跡C地成 ⁷⁾ ☆若江北遺跡 第II遺構面水田耕土 ⁸⁾	八尾 ¹⁰⁾ 尾第南 ¹⁵⁾ 遠次 ¹⁶⁾ 跡跡201	田井中第一期
			☆山賀遺跡土壙 ¹⁰⁾ 中層	龜井遺跡 ¹²⁾ (#02) SD 1502	田井中第二期
	b	I-2	山賀遺跡 ⁹⁾ 鶴川 ⁷⁾ 上層	八尾 ¹¹⁾ 南日進燃跡道	田井中第三期
中段階	c	I-3		95-2区 第3落 面込み 848	☆95-2区 第2面溝593 土坑857 第3面落込み848 北土器群
				(#02) ☆龜井遺跡(#02) ¹²⁾ SD 1401 SK1601	
		I-4	☆美國遺跡 BSK230 ¹³⁾ BSK241 BSK260	☆龜井遺跡(#02) ¹²⁾ SD 1503	☆94-1区第3面溝4
新段階	前半 II	a			96-3区 第6落 面込み 3 4
		b			

☆—比較的時間幅を有しないもの、又はある段階に当てはめる事が可能なもの。

第3期に属する土器が少量ながら正門西区で出土している事は、ある程度の重なりをもちらながら徐々に集落が東へと移動している事を示している。その立地する距離と出土する土器の時期から、北濠地区と正門西区に居を構えた人々は、出自を同じくする集団と考えるのが自然であろう。

田井中遺跡において、その集落が西から東へと移動する際に顕著な違いをみせるのが、刻目突帯文土器の存在である。今回報告した田井中遺跡95-2区の調査からは、これら弥生時代前期土器に共伴して刻目突帯文土器は出土しておらず、これは第3面落込み848でも同様である。遠賀川系土器の内に數%の刻目突帯文土器（長原式）が共伴している北濠地区とは、この点において顕著な違いを見出す事ができる。田井中遺跡内における遠賀川系土器と刻目突帯文土器との共伴関係の多少は、西（北濠地区）から東（正門西区）へと集落の中心が移動する時期とほぼ一致するものと看取され、1遺跡内における弥生文化の浸透を考える上で興味深い。

田井中遺跡における弥生時代前期の集落は、西から東へとその中心を移動しながら繩文色を払拭し、95-2区第3面落込み848に大量の土器が廃棄される頃には、弥生土器を使用し、鍬・鋤・石庖丁等の農耕具を用いて水稻農耕を継続的に営む、いわゆる弥生村落のイメージが確立していたものと考えられる。その傍証の1つとして、大阪府教育委員会第2次調査で検出した耕作地開発に伴う溝群や、志紀遺跡における本格的な水田經營の開始を挙げる事ができるであろう。

7.まとめ

今回報告した調査区の中でも、95-2区はその豊富な出土遺物、特に弥生時代前期土器の多さには目を見張るものがある。また、その中でも落込み848から出土する土器が最も多く、試行錯誤しながら整理・集計作業を進めてきた。その結果、①若干の時期幅はあるものの、95-2区落込み848出土土器は、これまでの河内地域における弥生時代前期土器編年の中での空白部分を埋める資料となり得る。②これまで前期集落の移動が論じられてきた田井中遺跡ではあるが、土器の前後関係を明らかにする事での説を追認する事ができた。③北濠地区と正門西区とでは刻目突帯文土器との共伴関係が異なり、弥生文化の浸透を考える上で重要である。以上、主に3つの点を明らかにできたと思われる。

落込み848出土土器は、前期中段階から新段階へと移り変わる過渡期の資料であり、古い要素と新しい要素が混じり合った状態にある。本来ならば二時期に区分し、新段階への画期を見出したい所ではあるが、落込み出土という資料的な制約もあり、明確な答えを見出せないでいる。ただ、集落範囲からすると田井中遺跡、特に正門西区の調査はまだまだ緒に付いたばかりであり、近い将来良好な一括資料が提示される可能性が大きい。

膨大な量の土器を前にして、それについて意味のある位置付けをする事の難しさをこの一連の作業の中で大きく感じた。消化不足で終わってしまった感が強いが、今後の調査の進展を見守りながら、今回疑問に思った事を解決できればと思う。

第12章第3節 注

- 1) 佐原 真 1967 「山城における弥生式文化の成立—畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置」『史林』50巻5号
- 2) 井藤曉子 1981 「入門講座 弥生土器—近畿1—」『月刊考古学ジャーナル』No.195 ニューサイエンス社
- 3) 深澤芳樹 1988 「木葉紋と流水紋」『考古学研究』第36巻第3号
- 4) 管大阪府文化財調査センター 1996 『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告 第5次』
- 5) 北濠地区的調査は、大阪府教育委員会によって継続的に行われている。特に平成6年度・7年度に行われた調査（大阪府教育委員会 1996）では、前期古段階～中段階にかけての遺構が多数検出され、集落の変遷が検討されている。
大阪府教育委員会 1991 『田井中遺跡発掘調査概要・I』
大阪府教育委員会 1992 『田井中遺跡発掘調査概要・II』
大阪府教育委員会 1993 『田井中遺跡発掘調査概要・III』
大阪府教育委員会 1994 『田井中遺跡発掘調査概要・IV』
大阪府教育委員会 1996 『田井中遺跡発掘調査概要・V』
- 6) 寺沢薰・森井貞雄 1989 「河内地域」「弥生土器の様式と編年」近畿編 I 木耳社
- 7) 大阪府立花園高等学校地歴部 1970 「鬼塚遺跡」「河内古代遺跡の研究」
- 8) 管大阪文化財センター 1983 『若江北』
- 9) 管大阪文化財センター 1984 『山賀（その3）』
- 10) 管八尾市文化財調査研究会 1990 『八尾南遺跡（第15次調査）現地説明会資料』
- 11) 八尾南遺跡調査会 1981 『八尾南遺跡』
- 12) 管大阪文化財センター 1986 『亀井（その2）』
- 13) 管大阪文化財センター 1985 『美園』
- 14) 田井中第1期～第3期－大阪府教育委員会による北濠地区調査により提示された変遷。（大阪府教育委員会 1996 『田井中遺跡発掘調査概要・V』）

- 94-1区・95-2区・96-3区一本報告書掲載調査区
- 15) 広瀬和雄 1986 「第六章 考察 第3節 弥生土器の編年と二、三の問題」 『亀井（その2）』 勧大阪文化財センター
- 16) 正門西区の調査は、八尾市教育委員会・勧八尾市文化財調査研究会・勧大阪府埋蔵文化財協会・勧大阪府文化財調査センターによって実施されており、弥生時代前期の集落域と考えられている範囲には、一様に黒色有機質の生活商業物層が約10~60cm堆積している。
- 17) 岩瀬 透 1996 「第IV章 まとめ」 『田井中遺跡発掘調査概要・V』 大阪府教育委員会
- 18) 95-2区では、弥生土器と刻目突帯文土器は共伴していない。しかし、正門西区における他の調査区では、新段階に属する土器に混じって少量の刻目突帯文土器（長原式）が出土している。それを共伴とみなすかどうか問題であるが、現時点で公表されている資料を見る限り、積極的に支持するものではないと考えている。ただし、田井中遺跡に隣接している志紀遺跡では、包含層資料ではあるものの、弥生土器（中段階後半～（新段階）初め）に混じって刻目突帯文土器（船橋式が退化したと考え得る資料）が出土しており（勧大阪府文化財調査センター 1998 「第5章 まとめ 第2節 突帯文土器とI様式土器の共伴」 『志紀遺跡（その4）』 印刷中）、現時点で即断する事は控えておく。
- 19) 大阪府教育委員会 1992 『田井中遺跡発掘調査概要・II』
- 20) 志紀遺跡（その3）では、第14遺構面において前期中段階～新段階に比定される水田を検出しておらず、その下面（第15遺構面）において前期中段階後半のピット群を確認している。その為、居住域=田井中遺跡、生産域=志紀遺跡という関係を疑問視する意見もある（秋山浩三氏御教示）。正式報告がなされていないので詳細は不明であるが、第15遺構面で検出されたピット群をもって集落を営んでいたとするか、一時的な建物（作業小屋等）と考えるかで評価も変わってくるであろう。

第4節 田井中遺跡95-2区出土の石器

1. はじめに

今回の調査では多量の土器類とともに、数多くの石器類が出土した。特に95-2区では、約400m²という小面積にもかかわらず、3700点ものサヌカイト類と181点もの磨製石器が出土した。それら石器は第4章では全てを報告することができなかったので、特にサヌカイト類について具体的な数量を明示し、幾分詳細にその様相を紹介する。よって本節は、「考察」というよりは第4章の補遺編である。

なお本来ならば提示しなければならない遺物個々の計測値は、紙面の都合で省略する。

2. サヌカイト類の出土状態とその諸特徴

今回出土したサヌカイト類は、総出土点数の約53%にあたる1953点が包含層から出土した。また土坑188や土坑395のように、弥生時代中期の遺構から弥生時代前期の土器が若干量ながら出土していることを考えると、それぞれから出土したサヌカイト類にも混入品があるとみなければならぬ。しかしこれらを時期別に選別することは不可能であるため、決して1級資料とはいはず、かなり下位に位置付ける一群である。

第1章や本章第1節でも記したように、田井中遺跡駐屯地地区では8次にも及ぶ調査が行われているが、その成果はまだ十分に公表されるに至っていない。つまり弥生時代集落が展開した駐屯地西区では、調査地点ごとのサヌカイト出土状態を比較検討するための資料が揃っていない。さらに現在の弥生遺跡をはじめとする集落遺跡の調査方法では、出土状態・出土点数を重視する石器研究に耐えうる情報を提供するとはいひ難い。掘削土に混じって廃棄されたサヌカイトの数ははかり知れず（石核のような大型品より剥片のような小型品の方が廃棄される確率は高い）、また現状では、サヌカイト類の接合資料はほとんど皆無である。

さて、第3章第2節に記した基準に従って分類すると、表33に示したようになる。成品をはじめとするサヌカイト総数は3700点を数え、総重量105346.8gをはかるが、その大半は第0層及び第1面遺構から出土した。成品総数は479点（総重量18538.3g）を数え、成品がサヌカイト総数に占める割合は約13%（同重量比約18%）となる。

ちなみに縄文時代前期の石器製作跡の可能性がある高向遺跡で、F地区I層（部分）から出土した成品総数は1602点（866.94g）、サヌカイト総数164134点（36242.92g）、総数に占める成品含有率は約1%（同重量比率は2%）である。また弥生時代中期の石器製作跡と考えられる富田林市喜志遺跡では、成品総数280点（6665g）に対しサヌカイト総数は9362点（64383g）で、成品含有率は約3%（同重量比率は約10%）である。上記2例と田井中遺跡との含有率の差違は、単に調査精度の差に基づくものだろうか。

これらの包含層別出土傾向をみると、第0層では成品198点（同重量8669.0g）に対して総数は1357点（39346.2g）を数え、以下第1層出土成品総数24点（850.1g）に対し総数116点（5586.5g）、第2層成品総数0点（0g）に対し、総数42点（1136.0g）となる。層別成品比率は第0層15%、第1層21%、第2層0%である。

そこで各層出土遺物総量に占める割合をみると、第0層出土遺物総量38432点でサヌカイトの占める割合4%（成品の占める割合0.5%）、同じく第1層出土遺物総量7299点に対しサヌカイト含有率2%

(成品含有率0.3%)、第2層出土遺物総量1564点で、含有率3%（成品含有率0.0%）、となる。このようにみると、各層とも同じ割合でサヌカイトが出土していることがわかる。

遺構面別出土傾向をみると、第1面では成品189点（7143.2g）に対し総数1469点（43464.6g）、第2面では成品18点（466.6g）に対し総数160点（4986.6g）、第3面では成品17点（468.9g）に対し総数118点（3451.5g）となる。面別成品比率は、第1面13%、第2面11%、第3面14%となる。

この数値も、包含層同様面ごとの出土遺物総量に占める割合をみると、第1面出土遺物総量33333点に対しサヌカイト含有率4%、第2面出土遺物総量7589点に対し同含有率2%、第3面出土遺物総量は19002点で同含有率0.6%である。第3面の数値は、次に記す落込み848の影響が大きい。

遺構別出土傾向は、第1面土坑188がサヌカイト総数475点（12667.2g）に対し成品71点（2850.5g）、第1面土坑395が総数232点（8165.9g）に対し成品29点（1104.6g）と、第1面遺構中では出土量が傑出した。しかし後期後半に属する第1面戸戸386でも、総数110点（1581.0g）に対し成品6点（96.9g）を数える。ただ同遺構出土時期別弥生土器をみると、326点中後期土器は44点しかないことから、サヌカイトの大半は混入品である可能性高い。第3面では落込み848が総数87点（3000.3g）に対し成品11点（366.7g）、満889では総数14点（253.1g）に対して成品3点（71.9g）となる。

第1面土坑188では総出土遺物数11779点中にサヌカイトは475点あり、サヌカイト含有率は4%であったが、第3面落込み848では総出土遺物数17853点中にサヌカイトは87点と極端に少なく、サヌカイト含有率は0.5%となる。両遺構は時期の違いはあるが、遺物の出土状況や自然遺物などからみて廃棄土坑と思われる。その両者にこれほどの違いがあるのは偶然なのか、あるいは当然の結果なのか、不明である。

肉眼観察によると、弥生時代前期の落込み848出土サヌカイトには、金山産と思われるものではなく、二上山産で占められているという。⁵⁾ 田井中遺跡北濠地区の場合、金山産サヌカイトが一定量含まれていたそうで、わずかの時期差で、石材獲得方法の変化が指摘できるという。

3. 磨製石器類の出土状態とその諸特徴

磨製石器類は181点、総重量33062.1gをはかる。その種類別内訳を表34に示す。種類により重量の違いが大きく破損品も多いので、点数を中心検討する。

出土遺物総数に占める割合をみると、包含層では第0層38432点中磨製石器類60点で0.0016%、第1層では7299点中10点で0.0014%、第2層では1564点中2点で0.0013%。同様に、面ごとに遺構出土の遺物総量に占める割合をみると、第1面の遺構出土遺物総数33333点に対し磨製石器類58点で0.0017%、第2面では7589点中17点で0.0022%、第3面では19002点中30点で0.0015%である。

遺構別出土点数は、第1面では土坑188の遺物総数11779点中30点（13154.7g）と点数・重量とも突出し、磨製石器類の比率は0.0025%。次いで土坑395の9点（315.8g）、土坑279の4点（402.7g）、堅穴住居364の3点（95.7g）などとなる。

第2面では満593の8点（1830.4g）が最多で、他の遺構からは1~2点の出土に止まる。

第3面では落込み848の27点（6865.2g）が突出し、出土遺物総数17853点中の比率は0.0015%。他は満889の2点（718.7g）と土坑888の石窓丁未成品1点（27.7g）のみである。

以上、包含層ならびに遺物出土量の多い遺構でみると、遺物総数に占める磨製石器類の割合は0.002%前後と極めて低い。

表34 田井中遺跡

石器類 出土層位 ・遺構	打製石器類													打製石器類 合計		
	加工具			武器・狩獵具			その他成品	刮片			石核	未完成	剥片石器類			
	スクレーバー	石錐	石小刀	複形石器	石錐	尖端器		二次加工のある 剝片	表面剥離のある 剝片	銅片						
不明	16 668.4	2 5.0		1 26.1	6 12.8	1 8.9	6 206.3	1 27.8	98 2342.9	75 589.3	77 729.4	120 96.1	23 2271.4	12 455.7	438 7375.3	
第0層	130 642.9	3 27.7	2 16.8	19 811.5	8 33.1	6 163.5	25 1148.8	5 34.7	300 7848.4	237 4284.7	228 2551.7	220 180.4	128 1387.4	46 221.6	1 314.0	1358 3960.3
土坑 188	43 1987.7		2 30.5	8 484.2	3 8.9		15 420.2		79 2333.6	102 1738.3	105 1145.6	70 71.8	29 3773.7	19 741.7		475 12667.2
第 1 井戸 386	2 101.6	1 5.5					5 149.2	3 11.6	10 109.2	25 344.9	37 296.0	26 32.5	4 65.3	2 14.2		115 1752.0
1 土坑 395	30 718.6	1 4.8			1 2.0	5 16.7	1 344.5	1 38.0	39 1616.6	54 1098.7	44 821.1	34 35.4	38 3271.3	4 218.2		222 8165.9
その他 の遺構	53 235.6		2 8.3	5 131.5	6 17.1	2 37.5	190.9 189.5		92 2316.7	135 2263.5	156 1680.6	125 113.4	55 1103.3	15 390.0		647 2067.7
第1層	16 601.1			3 126.2	1 1.5		4 119.2		21 801.3	34 791.8	21 603.8	8 9.6	13 233.3	5 236.6	1 26.5	117 561.0
溝568 第2層	4 61.0								4 97.9		8 98.3		3 456.9			19 714.6
2 土坑 768	1 91.6									1 3.5		1 4.4	3 309.3			6 308.8
その他 の遺構	9 172.8				1 1.2	1 10.2	2 131.8		22 745.6	33 339.9	46 583.8	13 15.1	16 163.5	2 89.3		135 2661.2
第2層									9 261.0	4 43.3	19 264.6	5 6.1	5 561.0			42 1136.0
落込み 848	8 277.7			3 89.0					23 519.7	13 362.0	19 294.4	5 3.5	15 1335.5	1 18.5		87 3000.3
3 溝889 面	2 65.9			1 22.0					7 88.3	1 13.8	3 79.1					14 252.1
その他 の遺構	2 18.0			1 12.3					3 38.9		6 54.7	3 4.4	2 68.8			17 198.1
合計	306 13566.9	7 43.0	6 45.6	41 1544.8	26 76.7	11 236.8	67 2722.9	15 351.6	707 19376.1	655 11751.7	769 9015.4	630 575.8	334 41800.7	106 4288.8	2 340.5	3722 105667.3

95-2区石器組成

磨製石器類												石器類 総計	出土層位 ・遺跡		
収集具	伏採・加工具	武器	加工具	調理具	装備具	未定品	石材・石核	使用感のある礫・石など	合計						
磨製石器(未完成)	磨製石錐 大頭蛤貝石斧 偏平片刃磨製石斧など	抉入孔状片刃磨製石斧	磨製石矛	砥石おもぎ台石	磨石・磨石・凹石	防護革				1 71.2	4 521.4	442 7896.6	不明		
1 22.7	1 213.2			1 214.3											
33 96.6	4 30.1	3 154.8	1 28.8	1 37.2	5 204.1	4 102.4	1 11.0	3 217.8	5 676.7	60 539.7	1438 4508.9	第0層			
8 309.0		4 558.0	1 1.3		7 10545.1	3 88.3		4 160.0	3 303.0	30 13154.7	505 25821.9	土坑 188			
			2 33.3							2 32.3	117 1784.3	井戸 366	第		
8 28.9					1 30.9					9 315.8	341 8481.7	土坑 395	1 面		
3 120.7	1 85.7	1 342.6		1 316.7	2 390.4		1 25.6	4 46.6	4 69.6	17 2222.9	664 23102.6	その他 の遺物			
3 143.9	1 25.7	1 169.7						1 18.9	3 85.3	1 30.5	19 908.8	127 6513.8	第1層		
2 32.6						4 1544.8				2 253.0	8 1830.4	27 2545.0	溝593	第	
2 137.2										2 137.2	8 465.0	2 768	土坑 2	面	
2 61.2	1 51.0				2 458.1					2 260.8	7 851.1	142 4784.5	その他 の遺物		
1 19.5								1 8.3		2 38.2	44 1164.2	385 2	第2層		
4 128.8	6 305.8	4 1619.5			6 4300.1	3 453.0			2 55.0	2 77.0	27 6942.2	114 9942.5	落込み 848	第	
	1 42.7				1 676.0					2 718.7	16 971.8	溝888 3			
1 27.7										1 27.7	18 225.8	その他の 遺物	面		
64 397.6	18 1153.8	1 169.7	13 366.1	4 62.4	1 316.7	1 37.2	25 19657.0	14 3908.5	2 36.6	1 18.9	17 573.0	20 3542.6	181 33062.1	3883 138749.4	合計

※ 各種内上段は点数、下段は合計重量(g)

4. 成品別諸特徴

打製石鎌 石鎌は27点を数えるが、ほとんどが第0層もしくは第1面から出土したものである。このうち完形品は12点ある。完形品の平均重量は3.7gで、最も重いものは11.9g、最軽量は0.6gをかる。成品のうち形状の判別できるものの内訳は、凹基式4点・平基式2点・凸基式14点・有茎式1点で、凸基式が主体を占める。各型式を問わず、偏平面の剝片の縁辺部に調整を加えて成形したもの、つまり主要剝離面が顕著に観察できるものは6点ある。

石鎌未成品は25点確認した。内訳は、周辺に粗雑な2次加工を施したもの8点、先端・基部未作出のもの7点、1側刃・基部未作出のもの6点、成形途中の事故品と思われるもの4点である。また主要剝離面を大きく残すものは14点を数える。これらの最大厚は3~6mm程度と比較的薄い。

打製尖頭器 出土した尖頭器11点（うち完形品9点）中10点までが、第0層もしくは第1面の遺構から出土した。完形品の平均長は8.05cm、平均幅2.83cmをはかり、平均重量は24.2gである。最も大きい成品は長10.4cm・幅3.45cm・重さ45.9g、逆に最小は長6.7cm・幅1.6cm・重さ10.2gであった。

第4章図80に図示した尖頭器の多くは、主要剝離面を残し、縁辺部にのみ調整を加えたもので、茎部を有するものは、図80-1265の1点のみであった。

形から未成品と判断したものは、図87に示した一群を含めて27点あった。未成品の形状は、大きく①長軸方向の一端がやや尖り気味で、長さ6~10cm・幅3~4cm程度のものと、②長さ6~8cm・幅6cm前後のものに分かれる。図87の各個体はこの②の範疇に含まれるが、はたして尖頭器の未成品とみなし得るものなのかどうか確証はない。いずれにしても成品が1cm未満と薄いのに対し、未成品の場合1~2cmと厚手である。

石小刀 成品は合計6点、未成品と考えられるものは1点出土した。いずれも第0層もしくは第1面遺構から出土したものである。出土資料の大半が先端部を欠損するが、先端近くが折れ曲がるもので、内刃側には突起を持たない。本文でも記したように、図81-1279は石小刀か否か不明である。

石錐 石錐は合計7点出土した。出土層位は第0層あるいは出土層位不明が5点、第1面遺構出土が2点である。出土した石錐は、①頭部と錐部の境が明瞭で、錐部の長いもの6点、②頭部と錐部の境がなく、棒状を呈するもの1点であり、①に分類される1点（図-1282）を除いて、全て錐部途中で破折した欠損品である。このほか大きさ・形状から錐部と思われる破片を数点確認したが、上記数字には含めず、その他の製品に含めた。頭部は縁辺に簡単な調整を加えて成形したものが多く、概して主要剝離面が顕著に残る。

未成品は4点出土したが、成品の破損品が混じっている可能性がある。この中には、尖った一端を錐部にしようとしたものが1点ある。

打製石剣 総出土点数67点を数えるが、これは石鎌総点数の3倍近い数である。完形品は図化した3点のみである。残りの64点のうち先端部破片は3点のみで、残る61点は基部片である。これらは一端が破折し、両側縁に調整剝離を加えたものを基部片としたため、あるいは誤認資料を多々含む可能性がある。なお基部片には、側縁に研磨を施したものが4点（うち1側縁研磨は2点）含まれる。

石剣のような大型成品は、南河内地域の弥生集落から流通品という見解が一般的である。しかし栗田氏のご教示によると、石剣製作で生じるポイントフレイキングが、95-2区から2点出土していることから、田井中遺跡で製作した可能性が皆無ではないという。仮に石剣素材・未成品が当遺跡に搬入されていたとすると、図83-1290のような素材としては不適切なものも含まれていた可能性がある。

スクレイパー 306点と成品中最も多を数え、第0層～第3面遺構まで一様に出土する。不定形刃器と称されるように、形・大きさは千差万別であるが、刃部作出にあたっては、剥片の背面・腹面両側から剥離を行うこと（両刃）を原則とし、片刃は1～2点しかない。図84-1295のように、刃部が摩耗したものも少量ながら含まれていた。

楔形石器 各包含層・遺構出土品から42点を抽出したが、その認定にはかなり誤認もあり、再検討をする資料である。

石核 324点出土し、41800.7gと非成品総重量の約半分を占める。その大きさは、5kgの原石から数10gの石核まで様々であるが、概してその大きさは拳大もしくはやや小さい。

図90-1320や図91-1321のように、ほとんど剥片剥離を行わずに放棄された石核が10点ほどあり、50～60g程度の小型のものが2点含まれていた。このような「試し割り」をした石核は、①原産地で割って持ち帰ったもの（石核として使用できると判断したもの）、②原石のまま持ち帰り割ったが放棄したもの（石核として使用できない）、の2者が考えられる。

厳密には石核の範疇には含まれないが、図88-1316のように、小型化した石核を敲石に転用したもののが10点ほど確認した。その多くが重さ150g前後で、隅丸の立方体・直方体もしくは球形を呈する。周囲には敲打痕が顕著に残る。そのほかにも礫面に敲打痕を残す石核が、少なからず認められた。

今回石核については、上記のように単に石器素材という観点で分類したため、不十分な分類しかできなかった。本来石核は、①原石からそのまま剥片を獲得するものと、②大型の板状剥片を利用して、表裏を作業面とするものに分類できる。これらには、原石・分割礫あるいはほとんど剥離を行わずに放棄したものや、何らかのアクシデントで破折した事故品などを除外しなければならない。これも要再整理・要再検討資料である。

その他打製品 図88-1313・1314のように、サヌカイト成品でありながら研磨を加えたものがあった。1313の場合、おそらく調整剥離を加えた後研磨を加え、鏽を作り出したものである。図80-1265・1271の尖頭器にも部分的ながら研磨を施す。

2次加工のある剥片は707点(19376.1g)出土したが、その多くは部分的に調整剥離を加えたものである。しかし中には比較的大きな剥片剥離を行ったものがある。調整剥離との境界は微妙であるが、石核の側面が強いといえよう。

微細剥離もない剥片については、第0層、第1面土坑188・土坑395(中期)、第3面落込み848(前期)出土資料について長・幅比率をグラフ化(図237)し、前期・中期に剥片の差違があるか否かを確認した。この剥片資料による限り時期的な変化もなく、意図的な剥片獲得もないようだ。

そのほか、水磨した剥片もしくはそれを素材とした成品・未成品が2～3点出土しており、被熱を受けた石核・剥片も若干量出土している。

磨製石庖丁 以下の磨製石器個々の説明は第4章第4節に譲る。石庖丁は64点出土した。刃や背の潰れ痕の頻度が高い。出土点数の多い順に、第0層の33点、第1面土坑188と土坑395の各8点、第3面落込み848の4点などがある。

石材同定は肉眼及び顕微鏡で行い、緑泥岩38点、泥岩8点、粘板岩6点、安山岩3点、頁岩3点、緑泥片岩2点、凝灰岩2点、砂岩1点、花崗岩1点としたが、風化や研磨のため識別には困難を伴った。安山岩や花崗岩は遺跡近くの旧大和川流域に礫がみられる。泥岩や砂岩は和泉層群に含まれる岩石に酷似している。緑泥岩、緑泥片岩、粘板岩の採取地としては紀ノ川流域が推定できる。⁷⁾

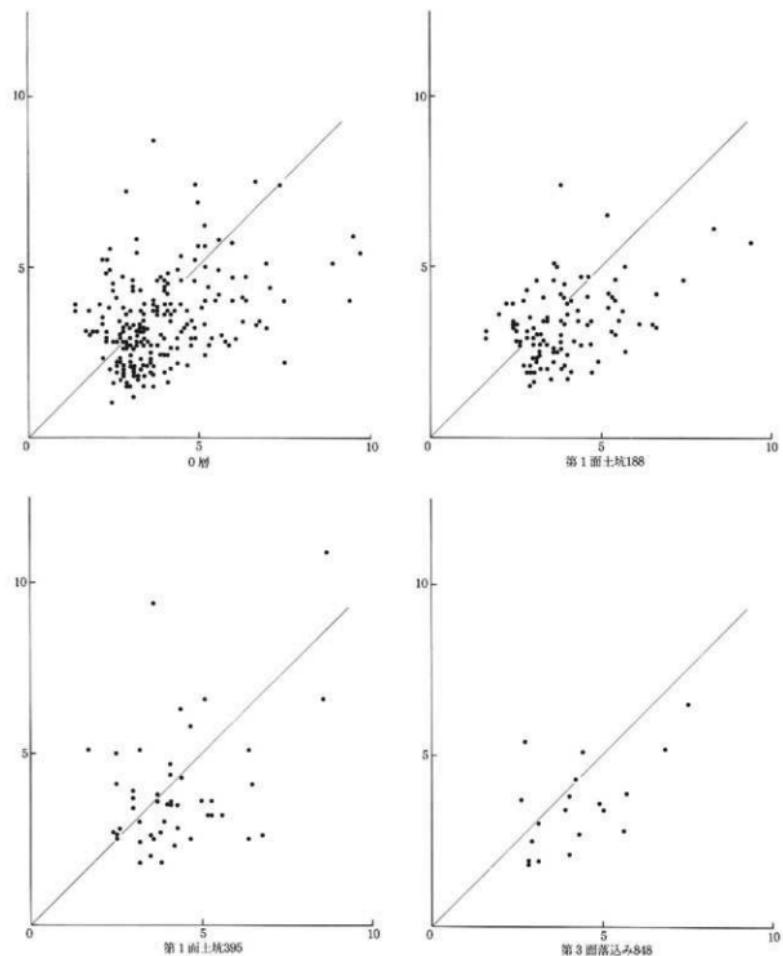


図237 95-2区出土剣片の長・幅比率

未成品18点には、各製作工程の資料がある。特に第3面落込み848で、成品の4点を上回る未成品6点が検出されたことは注目される。

磨製石斧 太型始刃13点、偏平片刃類4点、抉入柱状片刃1点、計18点出土した。石器出土数の多い遺構に複数の石斧も伴う傾向がある。図96-1344の偏平片刃状石器は関東地方に、図96-1346の抉入柱状片刃石斧は北部九州地方にそれぞれ類例が多い。

磨製石矛 図93-1328は幅6.0cmの磨製利器。このような形態の磨製石器には石劍、石戈、あるいは石

矛がある。鉄剣形磨製石器は近畿地方では中期後半から後期前半にみられるが、本例は石剣にしては幅⁸⁾が広い。石戈は大きくは無櫛の九州型と銅戈を模した有櫛有茎の畿内型とに分類されており、近畿地方⁹⁾ではこのような形態は考えにくい。幅6.0cmと比較的広いことから、石矛とした。

磨製石鎌 図93-1329の磨製石鎌には抉りがなく、長さの割りに厚味がある。石矛・石鎌とも北部九州を中心に分布するが、近畿地方でも類例の再検討が必要であろう。¹⁰⁾

5. おわりに

最後に特徴的な事象を2つ提示してまとめとしたい。

1つ目は、出土した石器の大半はサヌカイト製打製石器で、中でもスクレイバーは打製・磨製全成品の約49%を占める、ということである。さらに2次加工・微細剝離のある剝片をスクレイバーと同様の機能・用途があるとみなして加えるならば、実に約84%という数字になる。調査精度にも問題があり、かなりの誤差を含むことを勘案しても、あたかも獲得した拳大のサヌカイト原石は、主にスクレイバー類を作るためにあったかのようである。

2つ目は、既述したように、各層・面出土遺物総数に占める石器類全般の比率が一定しているにもかかわらず、第1層以下での打製石器・磨製石器の出土点数が極端に少ないとある。

今回3800点余りの石器類を分類し表34のような結果を得、上記のような問題点を指摘したが、果たしてこの傾向が一般的傾向なのか、当調査区だけのものなのか、現状では比較しうるデータがほとんどない。弥生文化の一端を担った石器類についても、他の考古資料同様詳細に検討されることを期待する。

なお、95-2区から出土したサヌカイト製石器類は今後産地同定分析を行う予定である。石核・楔形石器・2次加工のある剝片の再検討も含め、あわせて公表する機会を設けたい。

第12章第4節 注

- 1) サヌカイト類全般については、光石鳴巳氏（奈良県立橿原考古学研究所）よりご教示を得た。
- 2) 大阪府教育委員会他 1993 『河内平野遺跡群の動態』VI の分類による。
- 3) 効大阪府埋蔵文化財協会 1989 『高向遺跡』
- 4) 大阪府教育委員会 1983 『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・VI』
- 5) 栗田薰氏（富田林市教育委員会）よりご教示を得た。
- 6) 平井 勝 1991 『弥生時代の石器』（考古学ライブラリー-64） ニュー・サイエンス社
石鎌・石小刀・石錐は、本書の分類に従った。
- 7) 石材については、山口誠治氏（大阪府文化財調査研究センター）より全面的に教示を得た。
- 8) 長沼孝 1986 「磨製石剣・石戈」 『弥生文化の研究 第9巻 弥生人の世界』雄山閣
- 9) 下條信行 1976 「石戈論」 『史蹟』第113号
- 10) 下條信行 1982 「石矛の提唱」 『賀川光夫先生還暦記念論集』 賀川光夫先生還暦記念会
- 11) 横山邦雄 1976 「弥生時代石鎌出土遺跡地名表」 『板付』 福岡市教育委員会
松尾泰子 1984 「弥生時代の磨製石鎌について」 『西部瀬戸内における弥生文化の研究』
山口大学人文学部考古学研究室
水島裕夫 1985 「石鎌」 『弥生文化の研究 第5巻 道具と技術I』 雄山閣

第5節 田井中遺跡周辺の戦争遺跡

1.はじめに

当地一帯は、アジア太平洋戦争当時陸軍が大正飛行場を建設、航空部隊が駐屯していた。戦後宅地開発などにより様相は一変したが、現在もなお当時の遺構が所々で遺存する。今回の調査では、機械掘削中に陸軍が建設した格納庫の基礎や、その他付随施設の基礎杭などを検出することができた。これらは、本来発掘調査の対象とならない資料であるが、航空測量の際杭跡などを攪乱として記録にとどめることができた。

ここでは、まず戦前の地形図から当地の景観を概観し、戦後間もないころの航空写真から、大正飛行場の様子を探り、航空写真などの分析や現存資料、さらには発掘資料を通じて、大正飛行場関連施設の復元と若干の検討を試みたい。¹⁾

2. 大正飛行場の沿革

1934年朝鮮神航空協会は、田園地帯の広がる志紀郡大正村字太田に、京阪神地区の防空用飛行場を建設し、併せて航空搭乗員を養成する目的で阪神飛行学校の設立を決定、1938年開校した。²⁾当地のすぐ東側には生駒山地がそびえるため、東方へは離陸にくかったが、上空の気流が安定し、付近に障害物もなかったことから選定されたという。開校当時練習機として、陸軍から95式1型練習機5機・95式3型練習機5機を調達、最盛期には95式1型練習機10機・95式3型練習機13機・93式地上中級練習機3機・90式機上作業練習機2機を有した。

陸軍は、第1次世界大戦におけるドイツ軍の対イギリス本土空襲を契機に、1935年以降作戦飛行場・防空作戦基盤の建設に着手する。³⁾1940年陸軍は京阪神地区用の大防空飛行場建設を計画し、同校は無条件で軍に接収された。統いて軍は、太田・木の本・沼・志紀・八尾・長吉の地主に対し、「実印を持参せよ」と招集をかけ、強制的に用地を買収した。買収価格は1反=1950円程度だった。その際「……然しながら、平和克復の曉には、またもとの農地に還してやる」との発言もあったという。

工事は1940年10月に着工したが、その結果農地買収以外に①木の本～太田間・田井中～沼間の道路寸断、②大正尋常高等小学校や家屋の移転、③木の本・田井中の墓地移転、④平野川（了意川：みこぶがわ）の付け替えや灌漑水路の破壊、⑤一部用地買収の始まっていた南海平野線延伸計画中止、などの被害が出た（図238）。①の木の本～太田間の道路に代わって、河内地下道が建設され、③の墓地移転では、墓石搬出のため軍がトラックを用意し、家族や勤員学徒の無償労働によって実施されたという。このような工事を経て、1941年6月総面積約298ha、2本の舗装滑走路を持つ飛行場は完成した。⁴⁾

ところが終戦までの4年余りの間、どのような部隊が大正飛行場に駐屯したのか、正確な記録はなく詳細は不明である。断片的な記録を頼りに復元を試みると次のようになる。1941年9月97式戦闘機の第13戦隊が移駐してくるが、12月1個中隊を残し転出する。その後防空先任航空部隊の改編増強が実施、1942年8月大阪に第18飛行團が設置され、1943年4月に1式戦闘機（隼）の第54戦隊と2式単座戦闘機（鍾馗）の第246戦隊が移駐したが、早くも6月には第54戦隊は北海道へ転出する。一方第246戦隊は若干の移動はあるものの、終戦まで大正飛行場を本拠とした。1944年7月には第18飛行團を廃して、第11飛行師団を編合したが、その前後から諸戦隊の出入りが激しくなる。3月には3式戦闘機（飛燕）の第55・56戦隊がわずか1～2ヶ月間ながら駐留したのをはじめ、10月には2式複座戦闘機（屠龍）の第5

戦隊が、12月には4式戦闘機（疾風）の第101戦隊が来駐、新たに100式司令部偵察機の独立飛行第16中隊（後に独立飛行第82中隊となる）が終戦まで駐屯した。

この大正飛行場の建設・陸軍部隊の駐屯は、当地一帯に戦禍をもたらすことになる。1945年3月13日未明、大阪市内はB29の大編隊による未曾有の大空襲にあったが、その直後の3月19日朝、敵艦載機による機銃掃射に襲われ、ついに死者を出す。同年7月になると敵機による襲撃は激化する。10日に航空廠周辺に焼夷弾投下・機銃掃射を行い、22日・24日・28日・30日とほぼ2日おきに飛行場周辺の民家・工場などへ攻撃を加えたため、死傷者が続出した（図238）。また空中疎開した日本軍機がエンジントラブルで墜落したり、対空砲弾片が落下して民家などに被害が出た。当地は大阪市内方面からの疎開地であったが、逆に飛行場が近いことから縁故疎開や家財のみを疎開させた人もいたという。

戦争末期の1945年6月陸軍特別攻撃隊「国華隊」が、航空機のトラブルのため大正飛行場に着陸した。旅館「政乃家」に宿泊した隊員らは、ノートに遺書を書きとどめ出撃していった。また同月来襲したB29の大編隊を追撃した第246戦隊音成貞彦大尉は、そのうちの1機に体当たり攻撃を敢行し、同僚機とともに自らの尊い命を絶った。

終戦後まもなく進駐軍が駐留し、大正飛行場をはじめ旧陸軍関係の施設全てを接収した。1947年志紀村長に就任した大橋清治氏は、自らの回顧談の中で次のように記す。「何一つ文化施設もないこの村を何とか私の手で発展させたいという使命感から、土地解放の陳情を行った。1952年、進駐軍より旧陸軍用地の解放が許可され、志紀府営住宅の建設が始まった。」⁷⁾

進駐軍がテントを張った飛行場北東部は、1954年以降陸上自衛隊が駐屯し、大正飛行場は現在八尾空港（第2種飛行場）として機能している。

このように、第11飛行師団が駐屯した一帯は府営住宅として生まれ変わり、現在は高層の府営住宅に建て替え中である。その一角には、阪神淡路大震災被災者の仮設住宅がある。すぐ南側に位置する陸上自衛隊八尾駐屯地が、大震災時救援物資輸送基地として活躍したことは記憶に新しい。

3. 1932年作成地形図からみた大正飛行場建設前の景観

大正飛行場が建設される以前、このあたりは田井中・弓削・木の本・太田・本郷・沼という近世以来の集落が田園地帯の中に点在し、条里水田に沿った道で結ばれるというのどかな地帯であった。この中央を西流する了意川は、地形図をみるとかぎり条里水田の坪境を利用した川で、灌漑水路と同時に、江戸時代は年貢米輸送のための「柏原船」⁸⁾が往来していた。陸地測量部作成仮製図（1885年測量）においても、周辺ではひときわ目立つ河川である。

この川は、大正飛行場建設とともに現在の八尾空港北濠部分に付け替えられた。当時と現在の地形図を重ね合わせると、八尾市西弓削・太田新町を流れ、八尾空港A滑走路を横切り、同市南木の本2丁目付近で現平野川に合流していたことがわかる。一方、了意川とともに大正飛行場予定地を流れていた「ようだ川」は、付け替えられることもなく廃川となった。

現志紀駅～田井中を結ぶ東西道路（以下、東西道路）は、本来幅1m程度の里道であったが、1920年村道となる。大正飛行場建設後は、国道25号線との連絡の必要性から、1943年軍用道路として拡張された。現在田井中から西へ向かう道路が、自動車1台分程度の幅しかないのはそのためである。